

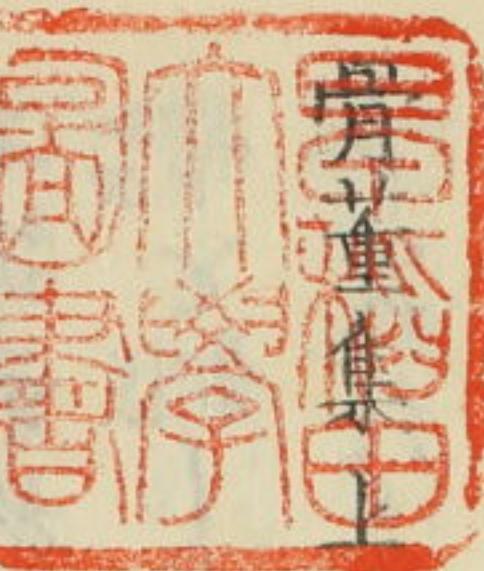


骨董集

卷之二

1545  
2

8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7



編中之卷

江戸

醒と輯

○名古屋帶

文禄前後より寛永の年まで古画どりる男女にもに縄と糸より繩又似たる  
兩方の縄とつけたりとゆふもかくまとて帶にあらる体をもつて其色は  
白あり紅なり青黄赤など或赤にて紺色あるもあり按て是いゆる名古屋  
帶かくべ一昔肥前の名古屋より唐糸として組ゆる多ふ名古屋帶も是  
又組帶ともいひと或人ひて和名鈔腰帶類云縄帶和名加良織絲為帶也  
とあり加良久美ハ韓組と名古屋帶ハ此韓組帶の遺制ふやあらん又源氏  
梅枝の巻ふ「だんのやくわくわくひも」とてとくとくとくとくの巻物の紐をひて  
和名鈔服玩具云四聲字苑緑青而黄也」のれ文禄前後古画ふ青黄  
赤かくべいろどうたる組帶あは是則絶れかくもは帶なき故

一代男

天和二年  
印本

小塩山の名木落花らうせん今ひくわこととまも  
一ノアノ男達其比ハ捕手居合しやうく世の風俗も系鬢賓ふくろううまげニすが  
鉤札上髪のく一ト袖下九寸たうだ。染少の組帶。さううけの長脇指あいぞと  
れりよ人大形は是王城小住人の有様。今にくべく昔と捨えどり北野よ詣で  
めざらし大谷小行て者と一折鳥部山の煙と五かつぎの吸啜筒小者よ  
アシム毛巾着ひかびるてゐる。ありうる。文昔繪と云ふ。其比とすむ慶長元和乃  
比とすてつり此一代男ハ西鶴の作なり。此人ハ寛永十九年の生れ。幼時  
まれきたるを成がむる。證もあらず。とくとく。其比とすむ。自分の組帶も終乃マ  
くの帶のかう歟。當時の男だそなとも組帶とひとびたら。やわん。同書五之卷  
小筑前柳町の事とくる。處小組帶屋とす。名目とぞ。當時の筑前小くも組  
帶と制一たましん。さて糸の名古屋帶ハ便利なうきゆ多ふ寛永以後へや  
すれたり。も貞享より寛保の比乃草紙とぞに徃く見えてる。組帶。名古屋

骨董上編中

織の帶。糸打の平帶。名古屋打の房帶。などすりて寛永以前の古制の如き丸打  
等で平打是今云糸とあざ類なり。

五金産業袋

享保十七年印本 卷之四小云

「名古屋織男女の革糸打がくらうり。女革ハ総つき

幅四寸八分。男革ハ幅二寸五分。在糸打。一枚ふちするもあらり。名古  
屋織とく。袋打やうじ。またも夏革から。とある。古名ハのくわながら。古制よたゞ  
とぞ知る。」

○再按に竹齋物語

寛永中。云。折ふ上人うちましくてそひふすへば。今あらむとくと

出たましもとをそくひそかやふそとそとえれど。ひざあくせぬ。上人。上人。乗船せむ  
もく。身は小袖。とくとく。湯衣。ひぢりめ。革の天下に。しめ。に二条通。百足屋。  
上人。あらむ。清草。とくとく。け心とつくり。とあん。は革のハッ打。金も。然まく。ぞうされ  
云。やく。とくとく。組革。とくとく。やく。或上人の。紫紫東。とくとく。絹。かまと。も。麻。子。北。まく。締の  
紫。小袖。とくとく。成りて。わく。ぶ。當時の。女。お。袴。東。と。あ。どく。へす。戯作。か。ぐ。と。あ。まく。と。く。

今見る僧丸帶とえて式正のものと見ゆ。かねて糸組の常の僧家まで用ひ  
なし。既み利休の像と画くに糸組の上着と道服の上ふ輩どり。出竹齋物語は寛永十  
一年考案され。御伽婢子。寛文六年瓢水子浅井了意作元禄十一年刻。卷之二。天正年中越前敦賀より金銀を  
かね持つて商人一人れ。男子とおもふあり。其隣は住有徳なる商人の娘と娶ふ。妻は  
さと(き)約(わ)りとせよ。すらりと真紅比撃帶とす。娘はもううつみて。金鳳鎧を  
ゆく。按これ原剪燈新話の金鳳鎧記と翻案になつた。物語なれば金鳳鎧  
真紅撃革につく。て天正年中れど。當時此革とりて用ひて。寛文乃  
呼んで。いづれだ。あくまでも一塊に傳す。

○火鍊 日

火鍊ともよばれ。近古にててるものなり。火鍊のなれ以前は物に尻かけて火鉢を足を燐  
なまく。古き繪巻又其体とえり。あらびて。右足から左足募出べり。

下学集

安火鍊。名目をそば尺素往来

小竹簾生炭木床。蓋合て。假風。若く追ひて。あり。

て火鍊のことをよひ。文安文明乃比をへ火鍊とよぶ。あからり。かく筆。

饅頭屋節用

文龜中秘刻

詞花堂藏本

火鍊火踏

火踏

火鍊

火鍊の文明。以後ふぞれ。あなべ。今も唐土。此方の火鍊の如く。炉上。棗。とて衣を

覆ふ。とて。清俗紀聞。冬。手炉と用ひ。極寒中。手と手足冷る時。脚炉。火と灰と覆ひ。椅子の前。或ハ睡床の前。又。足と其上。ふ並て温る。地炉。

石炉。と。此方の巨焼の様。地炉と。掠て並。あり。これハ南方。温暖。土地。火

用ひ。と。行厨集。煖手者曰。手炉。煖足者曰。足炉。清俗紀聞。足。脚炉。是なる。下。

○或ハ。按。火鍊。地火炉。の。大炉。又。手炉。木。根。を。つ。り。出。と。と。

い。ある。此地火炉。制。火鍊。火。爐。の。大。炉。又。手。炉。木。根。を。つ。り。出。と。と。  
や。ぐ。も。の。い。か。金。火。櫓。と。名。づ。け。し。木。根。と。れ。を。戦。國。の。時。火。制。を。あ。ん。ま。居。火  
櫓。形。に。似。た。ゆ。と。名。づ。け。ま。す。

○名古屋帶古圖

按行れ、これ寛永以前の  
古画なり。當時の童女、  
かく如き、其の髪形が一  
ゆゑ小袴と云ふ。

名古屋

○衣服縫著と  
鞆革の足袋と云ふ

二百年前古風

眼前より下に

○時代の繪と同様見るに  
婦女の衣服の末て水を磨き  
色あはれなく、其の上に墨で  
さうり書きとて、その上に本墨で  
威儀の下下かり一筆も云ふ

曳尾庵所藏



○寛永二十年印本

絵本みね繪

杏花園

吉はるおの成る成る象

冬の薪火とてなる

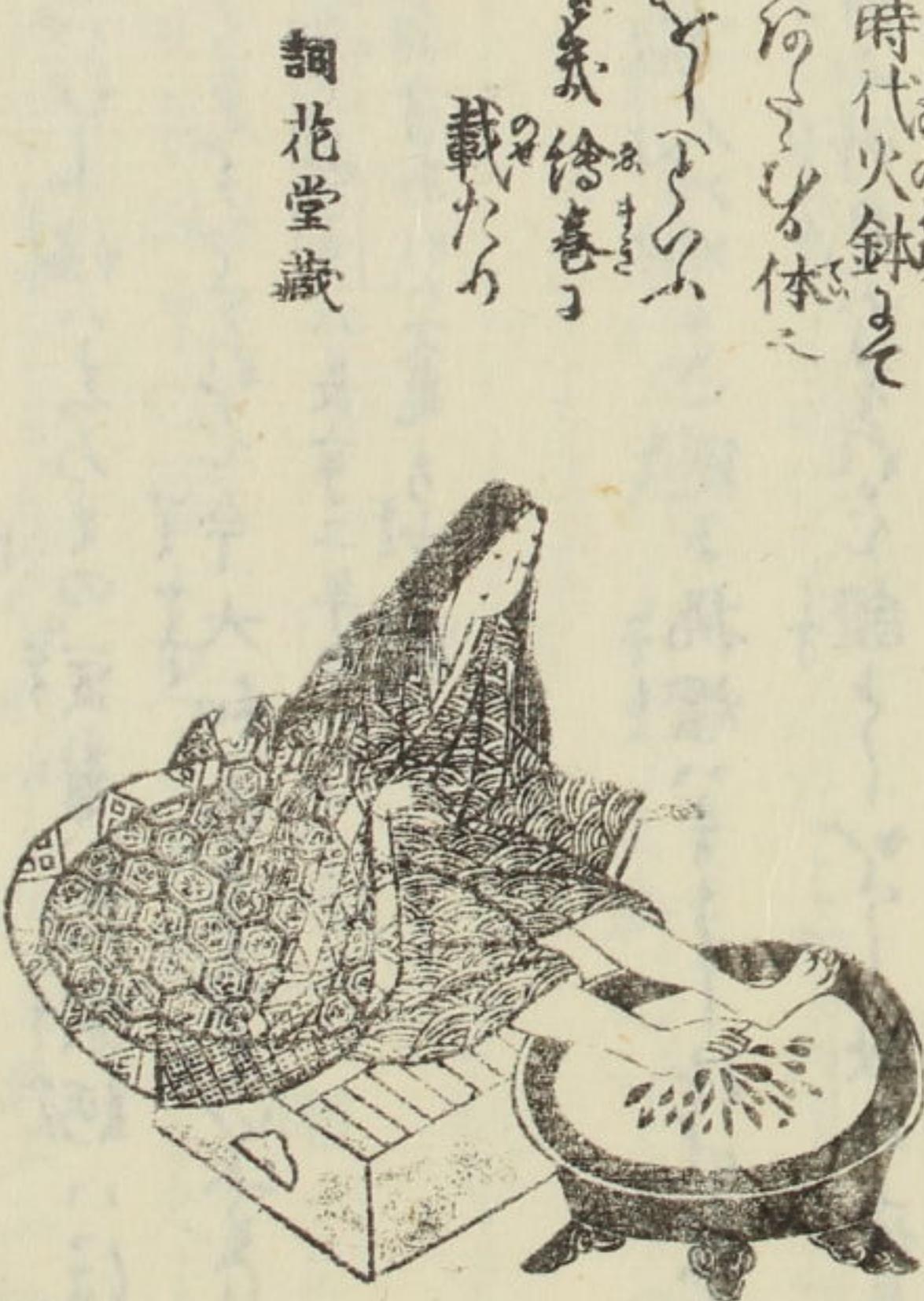
服子の蒲團と打坐と

坐すらかとす

○又寛永より明暦の  
比の能譜の如く

火焼と之るとねり  
辛ひれ根とまづつむ  
や櫻の号ひいでまく

がまうん



○かどやき 由り三

饅籠火棒燒 へ其燒たる色紅黒いと 棒比皮相似たるゆゑ此名からと 諸書より  
ハ不就音の説かる 新猿樂記 小香疾大根とて名 又名をあらかうをした香乃疾く  
他火鼻ふ入火謂なまべひと 饅籠火棒燒へよく相當ある名あり 饅籠と燒了りと

調花堂藏



筆方  
下見書  
本年  
數

切くもあて諸書と参考する文安

**五** 下學集 ふ。燈籠行燈挑燈 しょかべせりこゑ

**六** 篠鳴桃灯など 文安元年所書なり

**七** 宝德 七一番職人歌合 ふたら君より男續松を拂

すれど當時も挑燈と用ひゆるそれよし

**八** 宝子德 錦倉年中行事 管領のりそん

行列のりそん条 二丁行燈一具を金

當時もりそんよりらひざり一

**九** 康正 嘉禄 寛正 文正 一應 丈明 尺素往来

挑燈の名目とぞり文明以前ハ用ひゆる所あつて

**十** 長亨 道徳 明頤 文重 饗

頭屋節用 ま 挑燈此名目りそん此時代まで籠挑燈など

**十一** 永正 大永 或古記 大永三年の条ま門よらやうらんニツク

**十二** 天文 宍太記 天文十九年比条ま中間ま挑燈とぞそとぞ

**十三** 弘治 永祿 当時ハ既に挑燈とりひきのやうりそん

**十四** 日記 第五代記 片とも本寛文三年刻 卷之八 天文年中挑燈の

指物と用ひよる所を

**十五** 甲陽軍鑑 卷之一 永祿元年比令 ま不斷不可燃挑燈

とあり又卷之十下 永祿六年

の条軍用乃して武所よ小太荷駄馬一疋ま挑燈二つぢりび結付馬負ひも一人  
み一つばく續松りとてくとありかじも當時に挑燈へもく軍用よりらひな

**十六** 元萬 天正 或古説云永祿天正の比籠挑燈も今世れどくたび挑燈もりし

**十七** 文祿 慶長 好古日録 俗に云箱挑燈の一時始て制す上下と藤葛を以

編たり板と用ひ慶長以後比事とぞ天正已前比挑燈へ天正以後比物あつて元和

左のみことを古の此説と古説と合せ考証べたひ挑燈へ天正以後比物あつて元和

制をりそん此説と古説と合せ考証べたひ挑燈へ天正以後比物あつて元和

**十八** 寛永 正尚 慶安 吾吟我集 未得著 天正二年 置ぐゆやくさきならは挑燈よりとつて所あらふ  
とくと狂歌あれを既に當時をとづて挑燈とよふめり承應 明暦

**十九** 草紙 化鈴衣とて毛さ竹けむるふ丸き挑燈とよけく拂く拂く今の高挑灯れたゞひさり

手挑灯がりふむと水鳥記 寛文七年印本ふ丸さ挑燈と拂く拂く今で

**二十** 挑灯とふむ如水鳥記 寛文六年印本ふ丸さ挑燈あり俳諧夜錦集

五年乾坤乃

箱挑灯うそてれ有保文 やうとゆふむと當時に箱挑灯をえひつて用ひゆる爲

**延宝** 延宝六年板 萩川繪本 ふ箱挑灯と柄とつりたるものあり當時うもつこれと用ひたり

**トキシ** 隠蓑

延宝五年印本附合ひくふ「ゆりひの煙すゝろ挑灯」トクシそれを當時へ爐中挑灯

トクシ一すくよそ當時高挑灯と丸と用ひてと向まつてとて提ありく 提灯とへ

見ゆてば但神事葬送やくらん代用とゆるよきとて天和

貞享 元禄 当時此印本此草紙の繪と参考する延宝より元禄比本でもとく柄につくる箱挑灯と用ひ

印本此草紙の繪と参考する延宝より元禄比本でもとく柄につくる箱挑灯と用ひ

棒とくらむ箱挑灯とめり

雍正府志

貞享元年文庫并挑灯之類悉張脱之

一代男

貞享三年印本卷之四民家ハ婚礼の儀ニ柄れつくる箱提灯

宝水

柄れつくる箱挑灯と柄く行体とくれば式正

小も用ひたゞ一

小棒とくらむ箱挑灯と出だす

享保西川祐信の繪本其外當時此繪とくらむ

儀會小棒とくらむ箱挑灯と用ひたゞ

享保十七年比印本

万金産業袋 卷之一 挑

えく棒とくらむ箱挑灯と用ひたゞ

享保十七年比印本

万金産業袋 卷之一 挑

燈此類とくらむ箱挑灯と馬と馬とからく如く見とくねどりて按よ

今

金比類紙とて製とくらむと實小 御國の紙ハ万國ふにひくと至宝なり

弓張挑灯とくらむ馬上挑灯とくらむ本名とて元ハ武家方より始まつてよいかと一享保

以前此繪て此挑灯所見を一享保以後にまくわるいものかと一挑灯とくらむ

いとぞくの今ハ弓張挑灯と便利とてかくこれにまくべりとくは器物昔よりて

今ハまくの物もやが唐士と今もとむ挑灯とて唐紙の性とて多不挑灯拿

比類紙とて製とくらむと實小 御國の紙ハ万國ふにひくと至宝なり

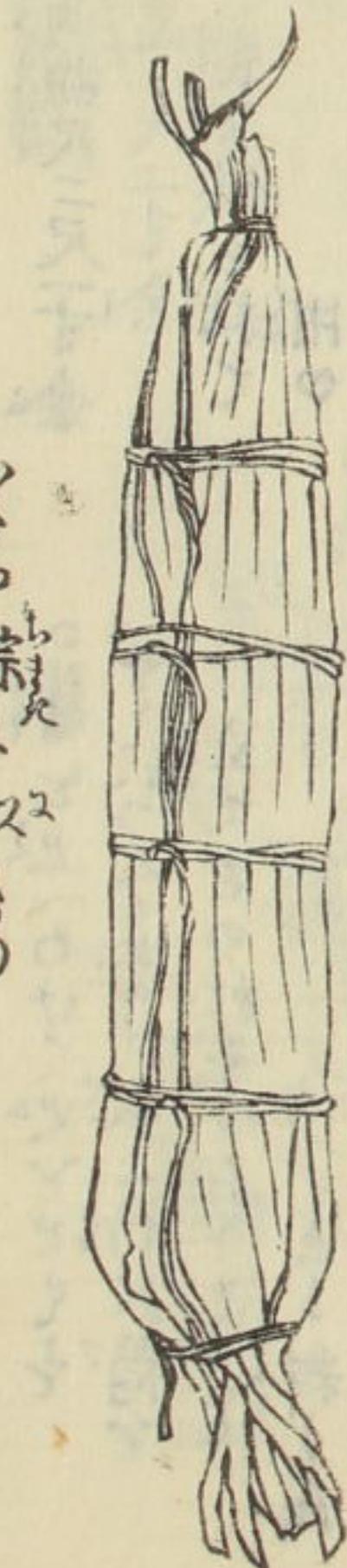
○因み云蠟燭の事ハ 令義解 主殿寮ニ油火爲燈蠟火爲燭」ととくそれを其東み

尚一 和名鈔 小も見とく文祿比異國より後此小制者一始むとくと

不警れ說なり

○羽州松脂蠟燭圖

長曲尺八寸五分余



毎夜葉に松脂とくらむ  
蠟燭乃くらむとくらむ  
出掌松脂挑灯乃竹  
筒に封て火ととくとく

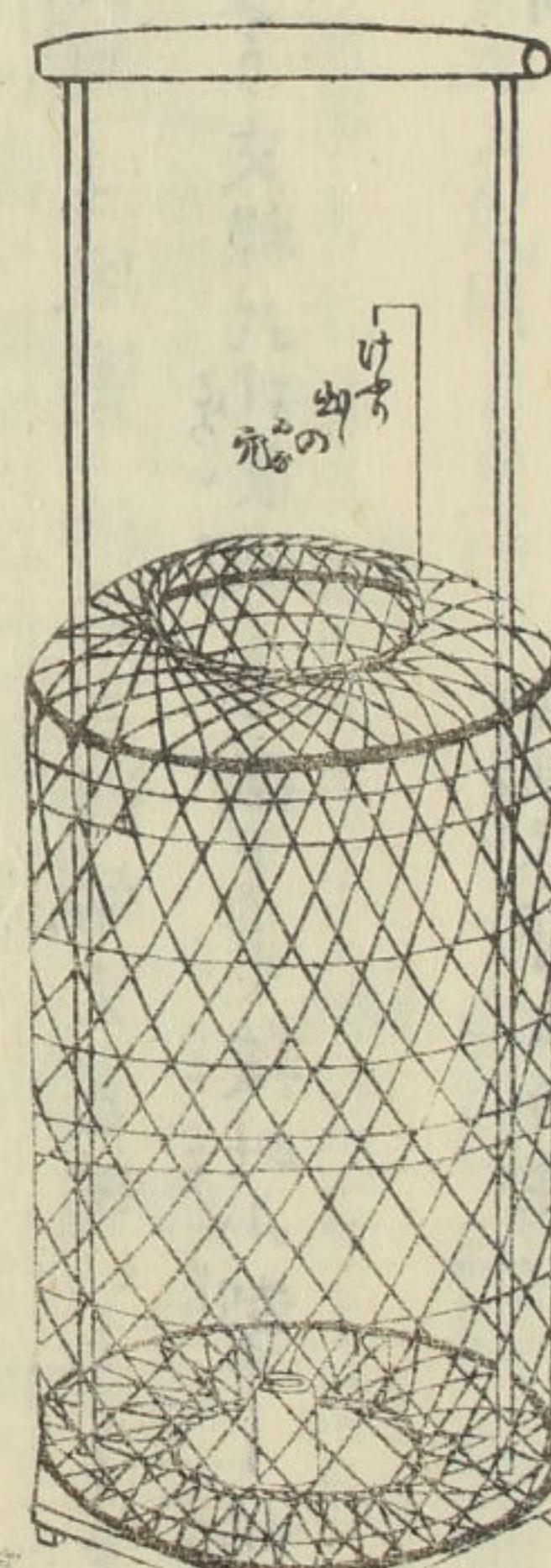
ひち棕と似う

○羽列籠挑燈圖

羽列ひよく今よし水用ゆこれ  
天正以前の挑灯古製とある  
至極奇形の異同大小も

うべかみハ予が得る  
ものと雪のあ道に載る  
め此臨いどりかく

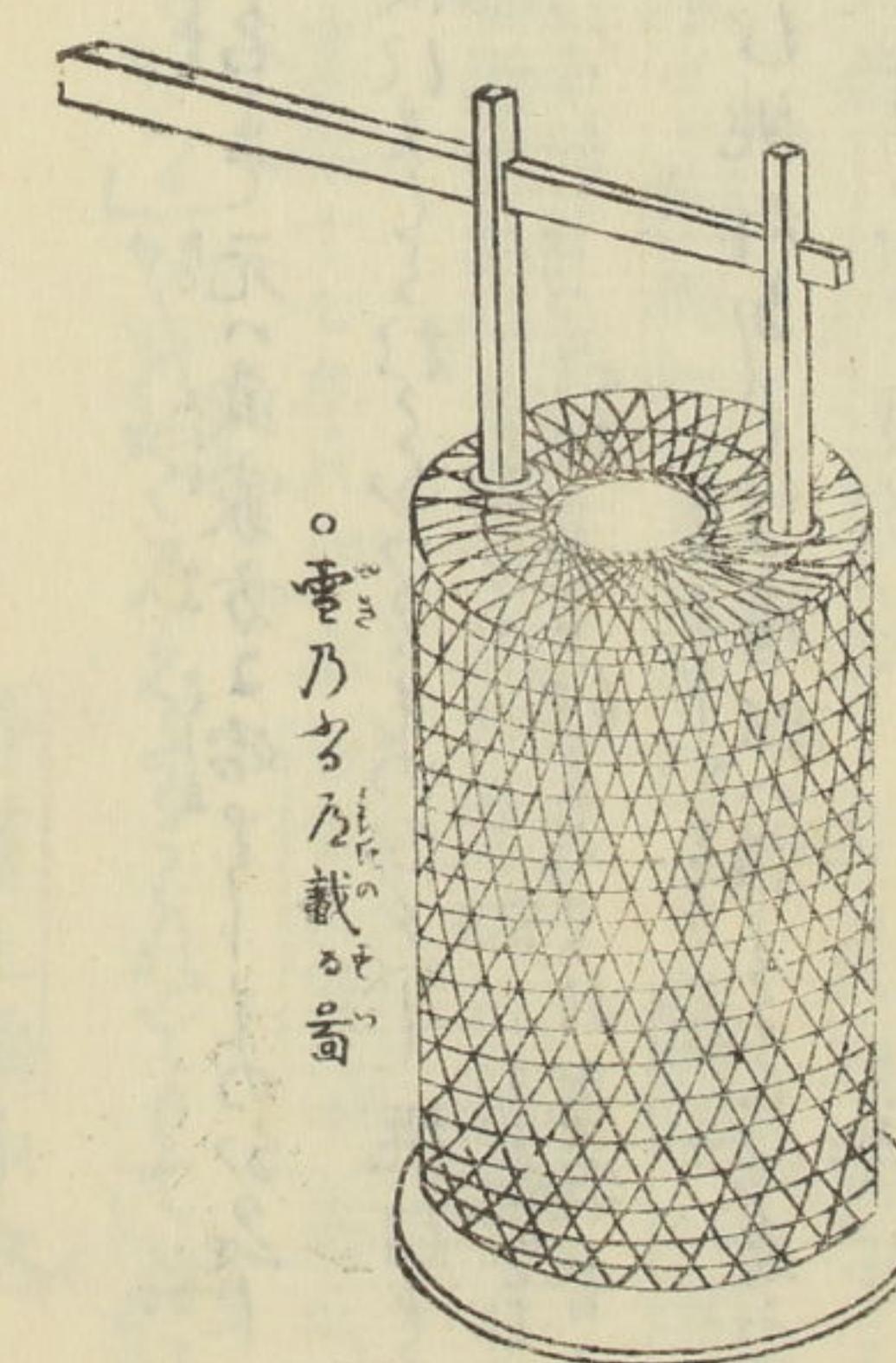
古制表記今れ  
のれどり



○總高曲尺三尺寸余  
籠高一尺二寸余  
表紙と糊て  
用ひ

○籠と上へあけく火とともと  
やうにつる基板又竹筒と  
立て右の松やまらうそくと  
立す料と

雲くも羽列の民家は  
云氣くもの如き無に雪の階をへにつけり。  
ありて之を守りんべしとむる者有  
見あらりけ成るはくまくらうむじき。  
太陽たいようとあるとト一火をほろく御す  
梅うめ。わちを真まとからひたまくらうつる。  
それふもとやもと横につくらそぐく。  
さけありくたあと。  
ねりいとし篭くわを造り。  
かとあてまでてありくたま。



○寛文七年印本  
水鳥記

所載

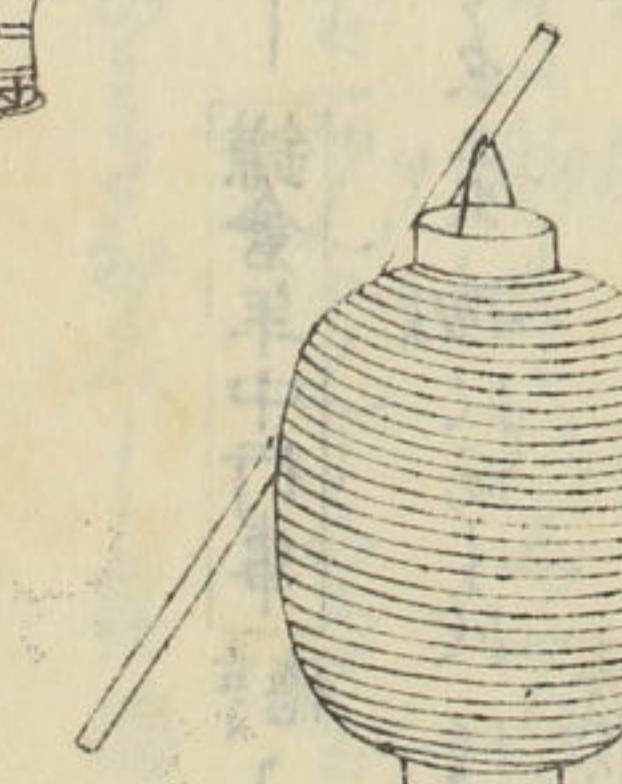
○寛文六年印本  
訓蒙圖

所載

○元禄十五年印本  
諸藝大平記  
此箇あり



○元禄五年印本  
胸算用  
所載



○寛文六年印本  
訓蒙圖

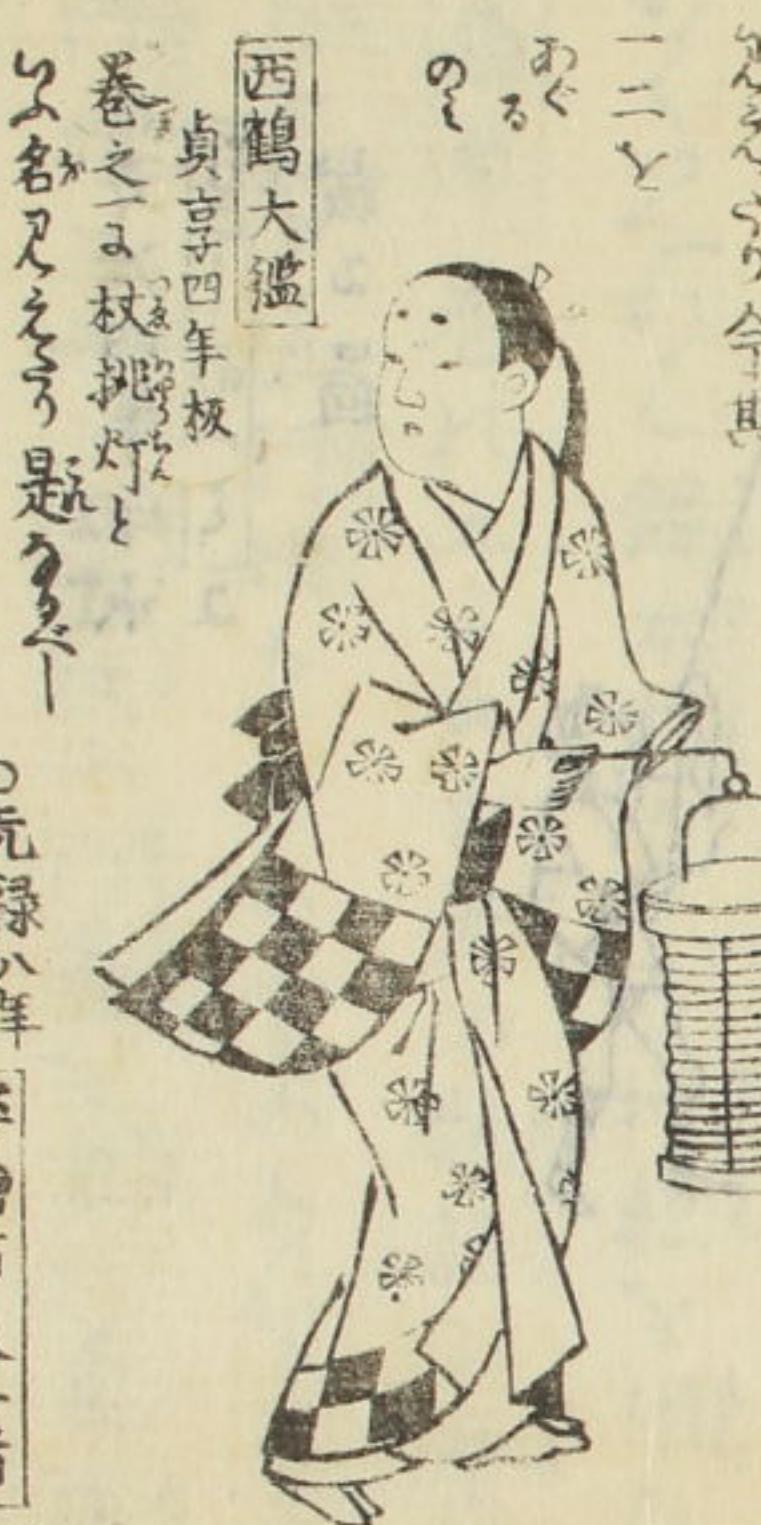
所載

○元禄十五年印本  
諸藝大平記  
此箇あり



○元禄八年  
麥繪百人一首

所載



西鶴大鑑  
貞享四年版  
卷之二  
名乞題

所載

○万治四年印板

ひよしわふみ

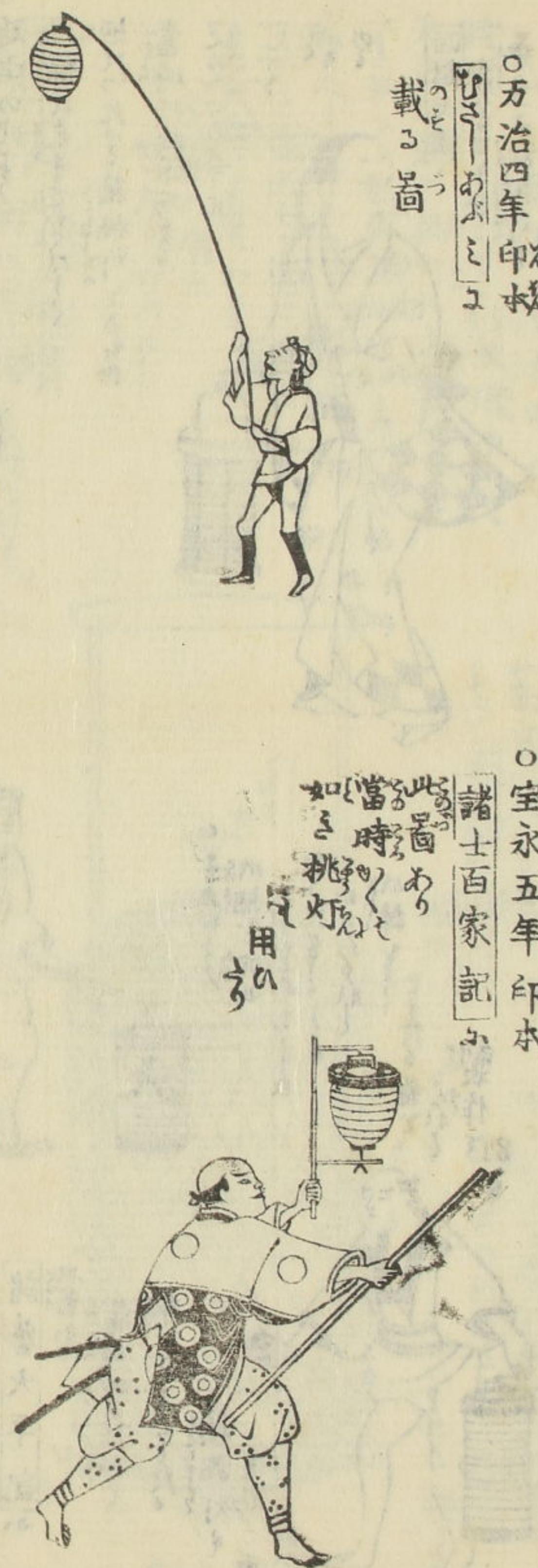
載る図

○宝永五年印板

諸士百家記

此置あり  
當時  
如ミ桃灯

用ひ



○行燈

五

行燈は始詳かに下学集 安燈籠行燈挑燈 やくあべ出一 鎌倉年中行事 德よ。行列は續  
松行燈と持てれる事多き。按され行燈は先家内と名異物にて、後續松の便り  
まゆゑを灯火より少ひて風より免持つりく為に造出だるものか。然則字義登

骨董上編 中八

りり民家へ端近く風も死ぬるに灯火ふちひりすが便ら氣を後小燈臺ふりく  
用ひたる所也。而して永正御撰何曾 行燈のうちに法僧は寮の物を手へたりとすを  
而んぞと解何曾かう法僧の寮の庵の物つそれとてしむとよが古言を以て  
下学集 小行燈とツがばつけたる後小上木ある時乃ちまよか一 貞徳乃御幸  
ゆも行燈とゆふ成にけり。

玄峰集

佐見鑑本田畠松多く壁とひとり

行燈て來る秋から夜と月面

嵐雪

ソノノルヒ鐘木田多く櫻松と用ひえ裸れ比ハ行燈をそ地くらひし人等と云ふト  
翁草 春比五よ云。古老の物語より今比世に有る謂ひて人皆わる事比やめの下道  
をふゆて行燈をもとすものあり。今比如く蝋手と中よぬへ近きゆなり昔より路次  
行燈は如く底板の灯臺と並たる處遠州より丸行燈をたれより角を行燈に之  
等と申す。此説比如く行燈は古製の今茶人の用る廬地行燈と云

物と見てかね。其製作歩くみ便りされど元家内ふを多益とあふ造出。されまらう。遵生八牋ふ有柄曰行燈用以秉燭。とす。唐土比行燈へ此方乃桃灯也。さうなり。

遵生八牋

本朝櫻陰比事

元禄二年印本

本朝櫻陰比事

元禄二年印本

當時近き所とありく。ハハレ如き  
行燈と用ひ。諸國。行燈と發行。  
御の年印水。二十四五年。前。の是  
上野。樹行。や。の宮。辺。そ。發行。  
行燈と用ひ。次。京。都。と。此。より  
これと。う。て。輕に。了。と。あり。と。わ。



今茶人北用る  
處地被燈と  
えこれ。似。よ。

笠。下。ふ。布。と。垂。

六

秋齋間語  
宝曆三  
年印水  
卷之二小亨祿二年比古画と載る左比如何。今案。主入比如何。  
被衣。や。れ。ぬ。ふ。市。女。笠。と。是。で。す。ひ。の。女。下。女。ハ。手。ぬ。く。ひ。の。く。と。一。ひ。く。は。  
布。と。頭。い。く。其。の。女。笠。と。か。す。た。り。職。人。歌。合。の。女。の。頭。よ。ま。く。布。と。別。ま。す。

骨董上編 中九

一向ノ下女ノテイ  
ナルヘシ袋ヲモタ  
スルハ古風ノフヘ

ソハヅカヘスル女トミヘ  
タリ下女ハカミヲサゲ  
ソハツカヘテイハカミヲ  
サクルトイヘトモカ  
ツラハカケタリ

秋齋間語  
升載亨祿  
二年古画

亨祿三年から今  
文化十年より  
か。を。二百。八十五  
年。此。昔。から。當。縣。  
の。女。の。服。被。体。と。く。  
か。う。此。畠。密。画。  
よ。ほ。う。が。れ。と。も。斯。  
お。う。じ。ま。と。  
お。う。じ。ま。と。

こ。よ。う。假。名。と。  
ち。み。る。と。  
秋。育。間。語。乃。  
ま。と。摹。た。



○寛永時代古画

此圖載

古畫  
此圖載



京山模寫

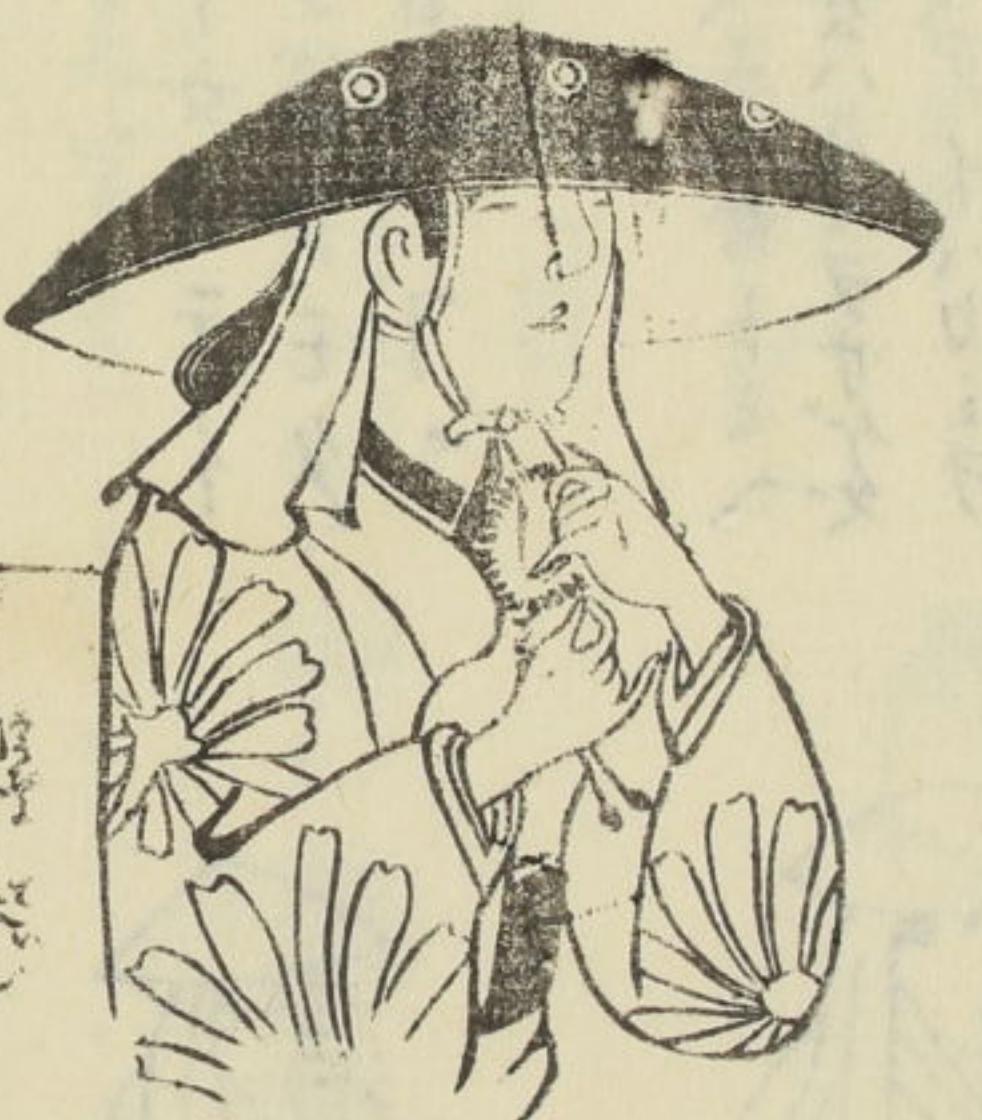
水花園藏本

寛文二年印本

要石  
竹載

○詞花堂藏本  
天和四年印本  
斐川の繪

此圖載



○絵筆見古畫と參考する  
寛永寛文天和比治まで  
北乃遣風等  
老女ハ寒風と云ふ  
若女ハ面と云ふ  
紺子等  
笠子等  
扇子等  
着物等  
手鏡等  
手鏡等



骨董上編中十

○女の編笠塗笠

七

婦女は編笠塗笠とかりへて古き繪卷をとひて見る近頃  
女は面とひへて取る道と行ふ漆笠と戴る又へ覆面たりより賤れ女も  
面とひへ歩行ひずれかり寛文比治まで女は編笠塗笠と深くて少し  
而て何へて奉た。寛文二年の印本 江戸名所記 かどの繪ととても考へ  
獨語 ふ。江戸は婦女外ふ出され昔へとまことに黒き縄とて既面とつと同じる  
わいふが其後縄とて既面とつと多く宝永れどもあうなりとくとく 礼の内期  
女子出門必擁蔽其面 くらべよのづくり人也

毛吹草 緋舟撰。正保四年刻

花笠とひり笠とひりとひみの郎

元弘

嵐山集。慶安四年。令徳撰。明暦二年刻

紫乃霞画一とくとくよぐ

良保

接するに以て、花笠比目やそと  
ひみの郎とて下に有る

幕

延宝六年刻

附

合の白  
ふくらんぬり笠志ぐれ乃秋

松意

持る者あるなり。筆致にてはまく。序と  
延宝時代に修業。総合と。

二代男

貞享元年印本卷之五云「四十七八より嘴びて小露草色比布子にむくらす

笠かくまんせこくろり代供と付て、やまと綿帽子と寺内礼扇と持そくあく」と見えども、  
貞享代比より塗笠へやまとれるゆ段女用訓蒙圖彙元禄元年印本卷之四云「人れ心のいろはを  
えりて、衣紋伊達姿真贋は、塗笠がへ革追風ゆうれ芳々たりとあき都女郎」  
云々。アリと元禄代より、塗笠と見えゆかうが如也。

其袋。嵐雪撰。元禄三年刻

菅笠や男若弱ち。花乃山

百里

當時ハ男代菅笠つたるに今一見さり一缺俗はれく元禄八年印本卷之四云「四十ほどの  
委れむと今に兵庫曲おりげふ浅黄みうごく裏に下革足代衣よりえぎの綱を  
ひねり笠ふらつき人などそひたすに赤いもじ紙うらけやかきりすこすこすれ

骨董上編中十

當時ハ塗笠は足袋共ふくらんぬり古風ふうじとゆだゆ同書お水口ルハ兵衛がよし木地  
ぬくらまに千とびとびの紙紐と付すが當世様みゆく○安永の代昔小豆を薄くし笠と

伴詣日本國元禄十六年印本

附

摺

友重

是等も當時塗笠れむくろてす。一證。松の葉元禄十五年印本。ゆり笠つるす。楊柳もよ。竹笠  
七絆人をも。とす笠ふくろておめをれ。ゆくまれ笠は。いよこのさのま。あくべとて。ばくら  
まくらで。これ考時れぬ笠の考れがよ。わくらて。影次女は。菅笠とくらむれりた。一證。

花見車

元禄十五年印本

朱拙

初生やふくらんぬりた。女子丸目

和漢三才圖會

塗笠

用薄片板紙張之漆黑色出於京師及大坂同書越前國

土產之部塗笠

戶子

古老れお淡と圓おーた。ふくらんぬり。曳尾庵藏本。わたり曳尾庵藏本。小兒は塗笠は小豆かよ。内よ。薬

牡丹梅椿水仙桔梗燕子花等と画なり。絵あそび紐と引通す。丁度絵入也。

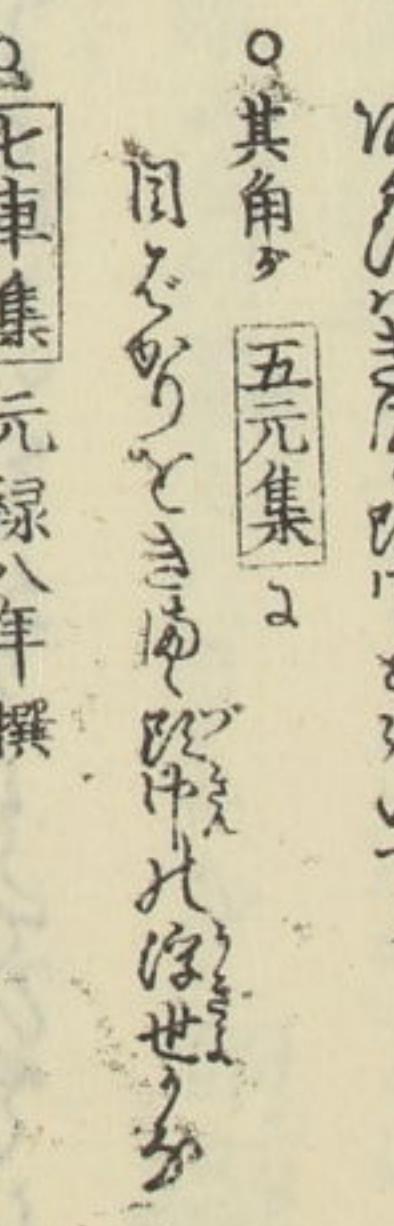
松蘿館藏本

○寛文二年印本  
江戸名所記

貞享の時代の

○石垣  
石垣水  
所載  
のまち

繪と呼べ  
あり



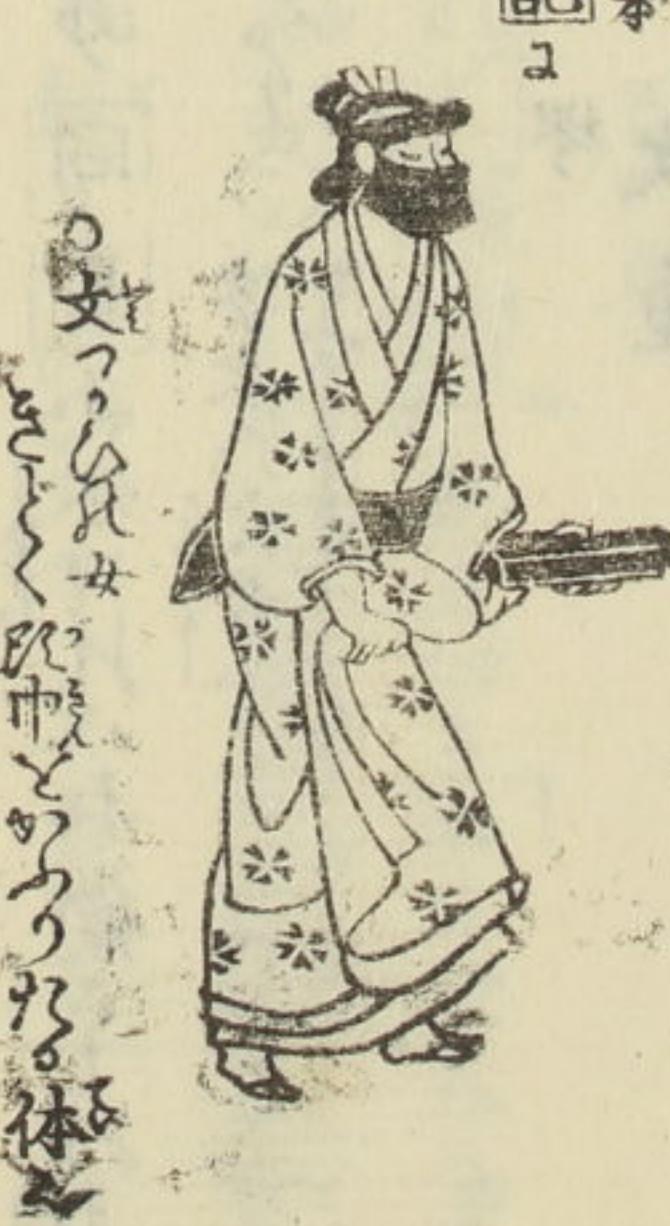
○反故堂不著延宝時代

離北小屋風

○貞享四年印本  
武道傳來記

○七車集 元禄八年撰

牛角



骨董上編 中土

○元禄中へよう登ももてて  
わせだむもひまと

○元禄二年印本  
本朝櫻陰比事

○天和庚寅  
元禄比北女編蓋形



天和庚寅

元禄比北女編蓋形

寛文延宝比北のくい姿ももととす

當時へもととんからかわらひ被れ  
少女こ菱川は傳よのう見ももとうゆふられと

小女郎手もとくいて男子もりつきり又一文字と

百ねえどもとやうれどもとて伏編蓋  
一かく紫一本

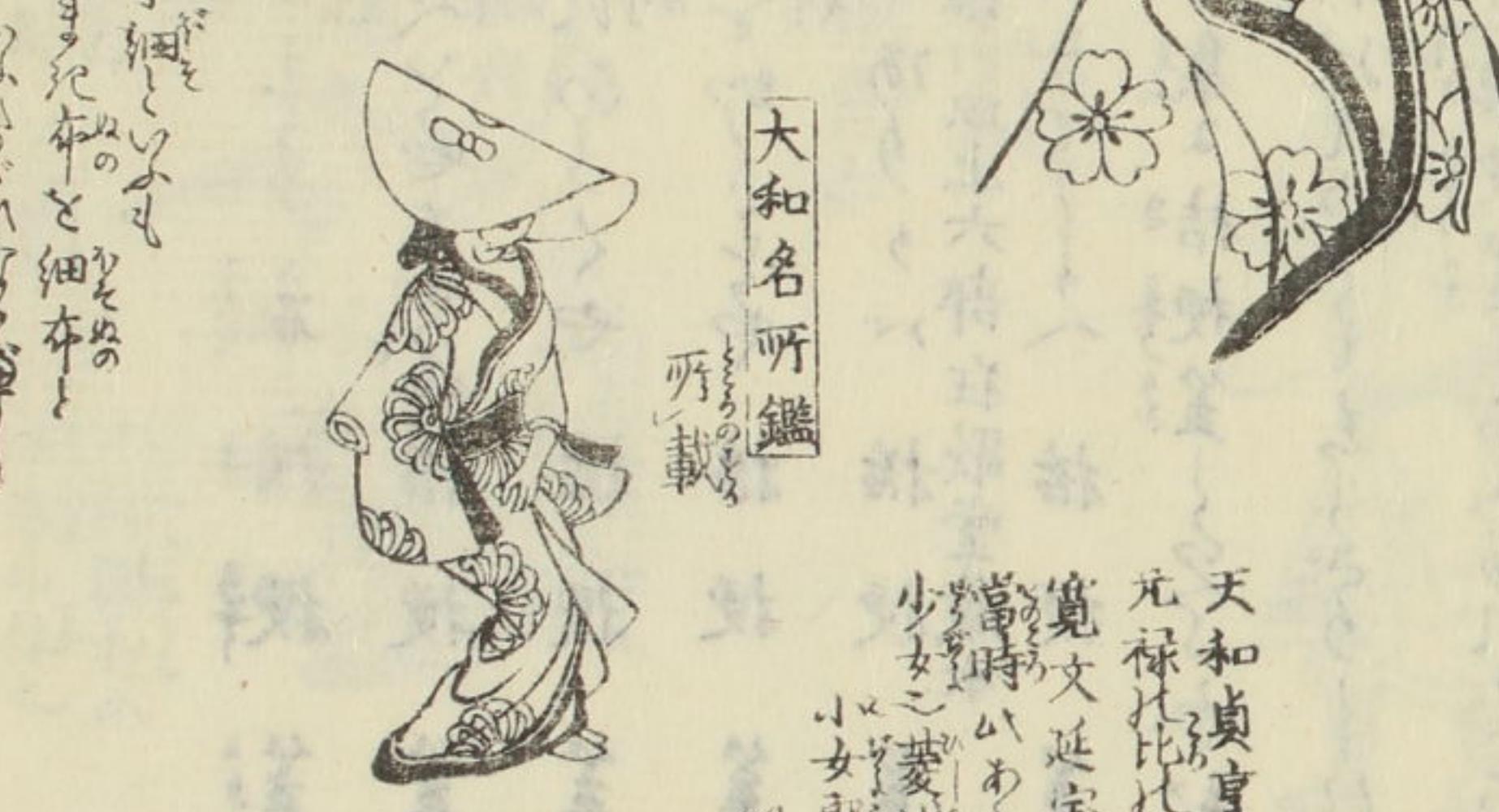
もやうて経後蓋とおをそありとひよと

見もとう又編目細密たると目被と  
称といふ。伊勢編蓋

○和漢三才書食の月をさうる

されば男子れ笠を

○天和四年印本菱川師宣北  
小物當时當時  
綿毛頭面くつらい  
中年女又老女  
ちかく見ええ  
み



○物類称呼  
御帽子

いとくとくがそ  
ととせんぼ  
こもん襷とよ肥後そ  
てがそもとへ腰革れりく  
とよす。醒て云これ製作此形  
れ。名なり。又のちの物  
紫れあうすある体と多く  
ゑむぎり見あき一これで  
湯にもむくにて手細と  
よくあつて脚革と手細りしも  
とせすに謂なしども下布と細布と  
いふとひかた

○大和名所鑑  
所載

○桔梗笠 [八]

大子草 寛永十年刻

毛吹草 正保四年刻

玉海集 明暦二年刻

口書似草 花うで兩にひくや 桔梗笠

陽忘草 花いけの耳とゆくとも 桔梗笠

歌謡集 时をひや通ゆりうば 桔梗笠

寛文五年撰 以上六部狂歌堂藏本

山比井 著作堂藏本 小も 桔梗笠

右此如くかくたる俳諧丸句集は桔梗笠と云ふが左の古圖と得て其形を知ぬ。又

と云ふ如くかくたる形はものともあらず、左の古圖に左の古圖と得て其形を知ぬ。又

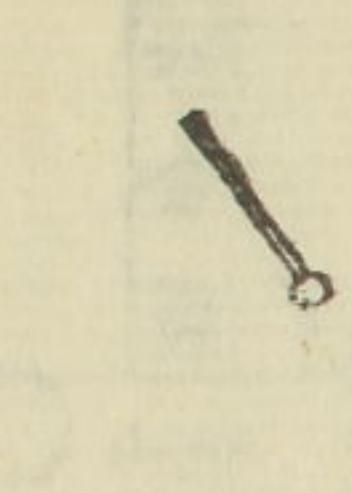
と云ふ如くかくたる形はものともあらず、左の古圖と得て其形を知ぬ。又

桔梗笠と云ふが左の古圖に左の古圖と得て其形を知ぬ。又

蝶こ子 作者不知 喜雅



桔梗笠古圖



一同もみんいろどり

もくふ此圖と載たり笠は青黄赤

天和貞享の比の繪並箇

大神樂打の  
体へ

大神樂打の  
少年の体へ

○ 淫世袋再考

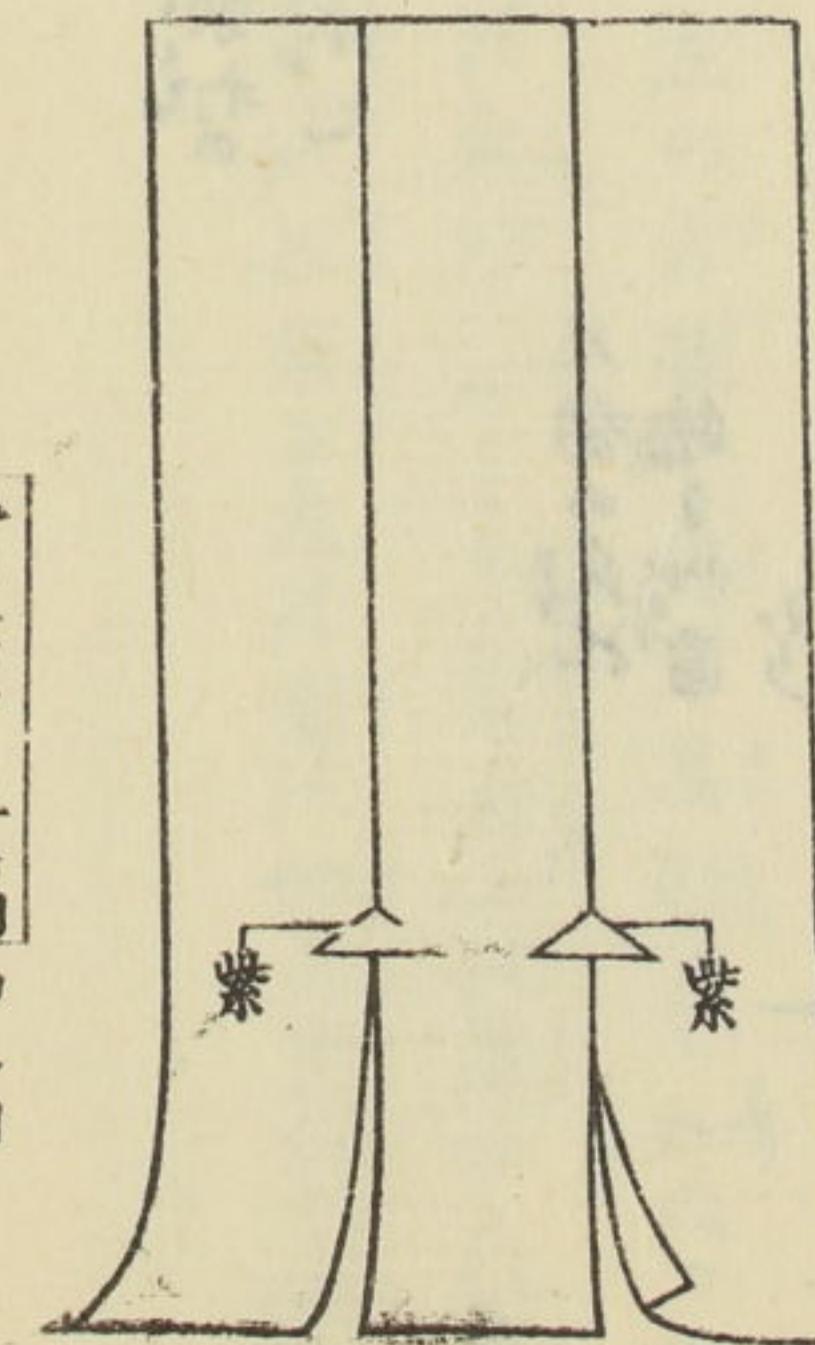
九

庵たゞく淫世袋や年乃歎

要 西

此句とりてかづひ考ふん淫世袋の勝たぐひか久  
火打袋と三角又縦やゑ小紙子又火打の名ゆり 此説ふれど三角又縦やゑ火打袋を  
何と云ふ。浮世袋も三角又縦やゑ火打袋也遺制を浮世どもも輩出されどもも  
がひきゆゑにあら名づけたりゆし 耶子酒 宝永大  
事ある余ふ。悉ヶ浮世巾着とす物と呼ぶる。とまこと。これ浮世袋と同物を  
後以てあらも称へなよ

○ 前述女郎の布簞は淫世袋とつけられと云へ  
此はゆゑどくのよしんに縦張り草うそ三角丸形だ  
つけられが浮世袋の形と似てゐるがゆゑと云ふ。右画はもとゆゑかこのよしんと云ふものと云ふ。左画は  
前記もとゆゑかこのよしんと云ふものと云ふ。右画は前記もとゆゑかこのよしんと云ふものと云ふ。



骨董上編 中古

本朝俗諺志 延享四年印本卷之二云 今傾城田代曖簞お紫北乳と似て乳守北乳と  
延享四年印本卷之二云 今傾城田代曖簞お紫北乳と似て乳守北乳と  
○ 又童女れ御業とぞいふうつめりてりてらふるのとくらうや粟燭北乳うすの三角丸ものを  
うせアラとふも其形は似てれども

○ 又於女ふたりを浮世とひらく。慶安明暦元禄れ比生をもあらゆり。吾吟我集  
未得著序北文小町を人れん衣簞て、衣簞うひれ小町ひどんとく雪仏北あねひをく合  
如飞

新續犬筑波

七夕 しまじよ射弓へうきせらひゆのわ

正信

俳諧系屑

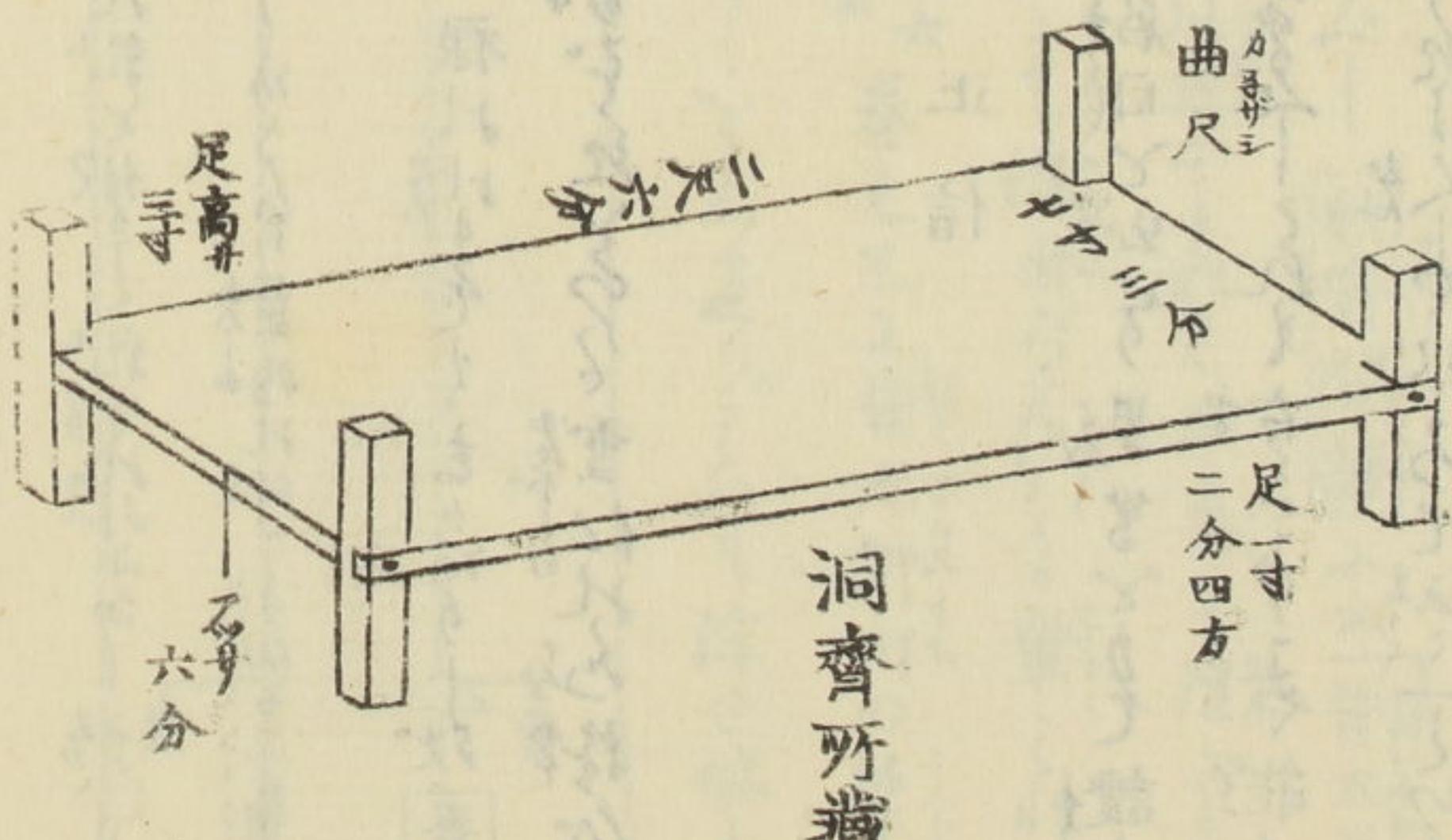
元禄七年印本 真之郎小暮世狂。暮世名

とひふ名目と出でて豊等とひそ證ふとひそ  
が不案るふ昔いとて當世様とひて浮世とひく。それも古きゆゑ能比狂言の  
きんトむことひふ舅のいへる言ふ「やくとや婚みぬうれし人ふやにうつてえ」とひふとひ  
れ當世人とりふが如く。岩佐氏と浮世又兵衛とひく。當世様の人物と画くるやゑ  
うん。又案るふ貞享の比かけ。物乃本よ。浮世笠あり 雅州府志 穎享ふ。浮世浮塵ゆり。

江戸室町の横町と浮世小路といふも昔浮世籠浮世浮遊がど盛りてお賣りゆる名あらゆるが今も甚だぐれの商人あらわす

### ○奥板の古製

文治時代の酒食論より画巻紋鏡永時代れ傳は此奥板とぞこれ式正化りけふ所もよきれども奥板の一様の古制とぞアリ。今も京都の舊家よりあれよゆき。好事者丈丈に文臺からうてもかくもこうとぞ又甲州に民家より今もこれと用ひる。表うて奥板とぞ裏そ裏顛とぞい便利とぞあらわす。



### ○大津繪の佛像

十二

元禄四年芭蕉粟津の無名庵より一時正月四日

### 大津繪の佛像

十一

かく口とまみ絵してやふよ古の仏像と画くとちよととくとからべ當時の大津繪の仏と持仏小掛る者れどありしゆゑふれのげつ仏繪のよおこかづ戯画へまつたなべてあらべられをこそ當時左れどく紀かと色ありされ

俳諧日本圖

元禄十六年印本

前々

附々

前々不知

大津

絵

後々

と

打住せ

吉

林

一雕

本朝諸士百家記  
宝永五年印本卷之八云大坂長町七丁目み圓扇屋善三郎より其の子善次  
大坂店は圓扇ともいへる七十有余れ老法師より中畠写半ばかり棚と物て大津  
繪の三事とかけ一の讚

絵ふかくも本にとどりしゆ門の浮世未來はくかのくらむ

○又享保十一年竹田出雲作セ一伊勢平氏年々鑑トシテ淨瑞璫又大津繪の十三  
佛トソニモアレを宝永の比モでもかの仮繪と用ひ享保れ比モジモ車ニ散在  
セものあタハレド今ハマテアタハレカ一たまく或人比奈也云模トクナユリハセ  
但今も太津小仮繪が在ヘシモレモ昔れトムイシカゲリ

○因小云一代男

天和二年印本  
詞花堂藏本

卷之三小寺泊北傀儡の家ナミキヒヨリ条ニ「屋風乃

押繪と見至る花絵とけく有難氣りれん形板木押の弘法大師崩北嫁入後金國  
太東の東門店左東門に連奴あれも大津追分ナシテモノギリスル都カヘ  
「くち云く」ハシモ天和比ハ戯子繪ともシキトアラシ  
刻板年号辨ナシベシトモ  
案天和貞享比年矣  
卷之四又「猪鹿梅竹左字ニテ  
枕屏風追分繪北奴が妻の命と君ふれべて赤丸丹ナシテモア  
題寫と接ヌ今昔と失ハシムものい大津繪之假名の如クニテ女比奈の  
花シテモアリテモアリテナリ塗壁北妻と考フ  
頭と両手ハ木ナリシ印外ハ墨ニモ  
大津繪後光蓮華坐トシテ  
丹蓮華ある。

○又五ヶ波津の草紙

刻板年号辨ナシベシトモ  
案天和貞享比年矣

卷之四又「猪鹿梅竹左字ニテ

骨董上編中十六

大津繪佛像縮圖

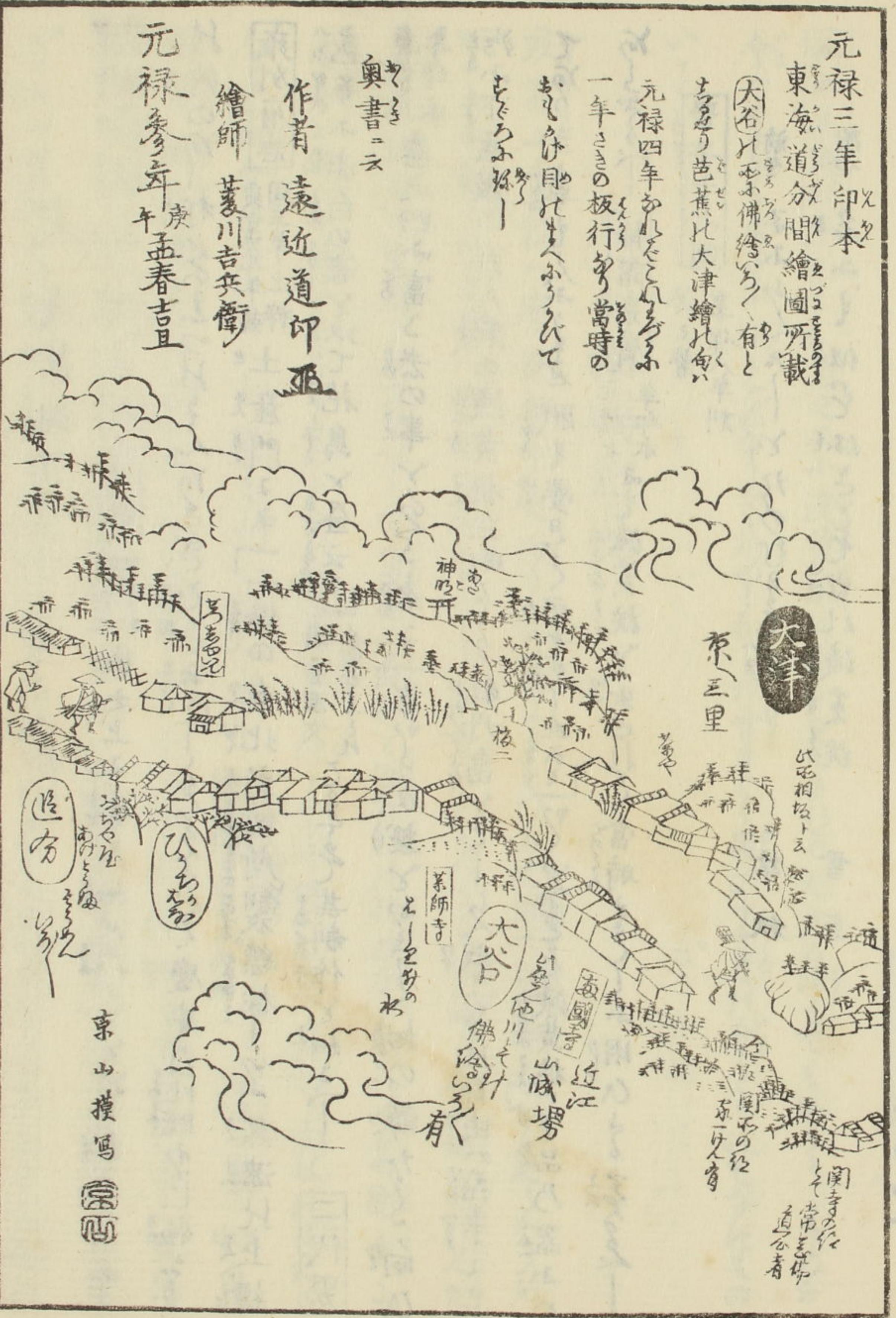
總長曲尺一尺七寸  
廣七寸五分強

頭と両手ハ木ナリシ印外ハ墨ニモ  
大津繪後光蓮華坐トシテ  
丹蓮華ある。

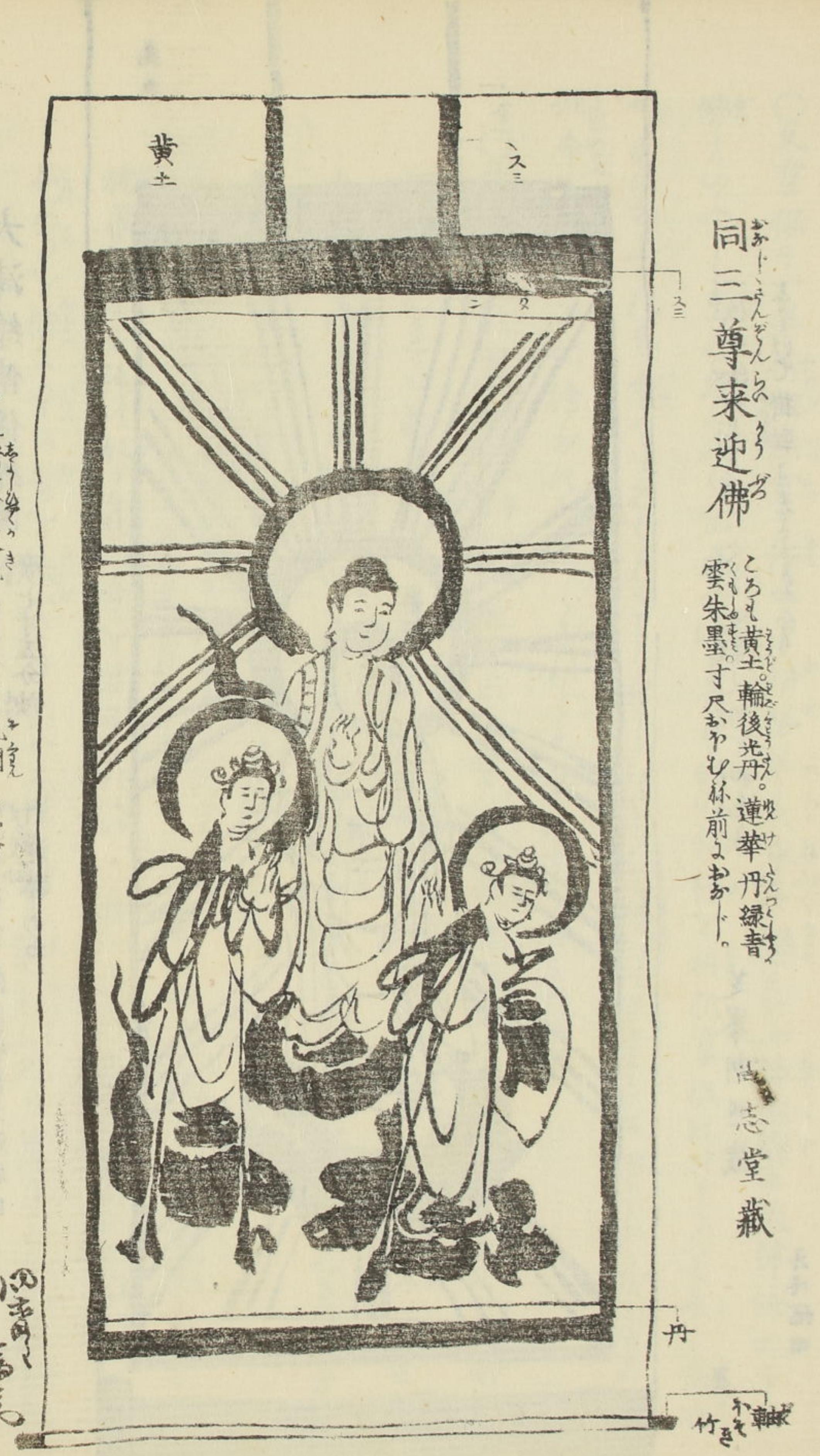


一枚の紙ハ上下中一文字。風帶。比形。彩色。  
あきれて掛軸。おもむりの如き

芝峯軒所藏



繪畫上編 中十七



同三尊來迎佛

諸士百家記より  
云朱墨寸尺おやむ林前よおかト

志堂藏

## ○淺葱椀

十二

昔淺葱椀より物なり志之双紙

慶安二卷之上より青玉板と云ふとくすり

化繪の所打うちまつはさん。而も此御器と云ふとくすりをも慶安乃比既ありし物乎

雍列府志

貞享元年基土産門

二條の南北新町所製。縹椀といふ。黑漆比上縹

色并小赤白の漆と以て花鳥と盈云々

三代男

貞享元年印本卷之四小富士老の事より云々「京から來とむと相の靜なる向ひ  
海小下厨敷二百人前後の浅黄椀三町ヒトリ牡丹畠と云々我よりは自由ハ花車又雲  
てなりき鼻も人ふくを臍も夢見く居てそぞぞ」りくらむを浅黄椀の下品乃器小  
名づけハ俳諧糸屑

元禄

年印本より浅黄椀と出でたを當時もくふ用ひる景

晋子十七回

享保八年刻

前々子ふかんとたのひ生

竿秋

附名ふも似ど好とこを出せ浅黄椀

雪点

骨董上編中大

## 御御名題紙衣

元文二年印本卷之二小浅黄椀

今へまく名づく聞えだきぬれのまへて昔りく用ひる歎にとれてうれもの

いともや

## ○重箱硯蓋

十三

或書ふ重箱ハ慶長年中重河食籠よりとづきて始て製造止

下学集 安文

ヤ。今按元重箱ハ衝重の遺製也。一衝重比制アリて縁高とす。縁高比足と  
とうて至ると重箱と云ふて古重箱小者初と廻入松丸折枝をもむるの衝重よ  
者地と組入る飾と畳ぐりのとあがゆ衝重も経つるよおける。はくまは比号河  
す。但食籠比号河重箱もよか。古御食籠ハいわゆる

衝重縁高。食籠比名とゆく重箱と云ふと尺素往来

明文食籠見えく重箱

比名食籠もあれば右記或書ふ重箱ハ慶長年中始てつくりとゆる。け  
がりゆ多岐み文龜本比饅頭屋節用

重箱比名目と云ふとゆる。かうかう能

狂言比。萬の花とくふ。時ふくとよど。生と死とわくせり。たゞ下を一つへと存ト  
わき一たれを。けうとまをりて、いきゆよ。又も次ふ繪様がまを繪に重箱よよくは、音  
とくわくおく出ゆしたる。とつてから。又鈍根草とくと狂言ふ。窟様とすれ内だ  
繕ひ。とくとくらう能の狂言のふくとくと前まをたびくつ如。そ寛永  
比ひもう元禄比までの古画或へ印本比繪などと参考する。酒宴よ肴と盛器の  
をえて重箱え松檜草花かどのふくとくと盛り。食蓄持。かく盛り全形  
りもれ今の硯蓋しのむのいと近年比造出。よりのうや十日を繪よ見くと  
○元禄十印本比繪よ重箱。ゆりて硯蓋な。耶子酒。宝永六年作。  
二箱も交す。自笑竹草紙。宝永七年板比繪ふ。硯蓋のうりて重箱ナ。これより後  
西川祐信がいける印本比繪などと同様に重箱のうりて重箱ナ。これより後  
それより重箱よ肴と盛。とく元禄比未よす。而て硯蓋よ盛。とく宝永年中よ  
始。アリとおり。但硯箱の蓋よ葉を載。とく古文記録或へ歌集をすくえ  
ハ宝永以前れ古風れ残り。なり

骨董上編中十九

山の井

慶安元年印本

卷之五。新黒谷比花見の事。とくとく。而やあら硯箱よ。物のま  
よくとくのととをかじりふたまし。とくとく。而やあら  
物のまよ。体とくとくのととをかじり。近世好事比。若古く草と盛。とくとく  
硯箱よ。肴と盛。とく始。とくとくてつひふ。一種。ヒ。物に。り。一。な。とくとくと  
硯蓋の式正ふ用。ゆる。新。は。あ。く。今。民。家。と。正。月。屠。蘿。酒。肴。と。重。箱。よ。盛  
ハ。宝。永。以。前。れ。古。風。れ。残。り。る。なり

三足猿

支考撰。上梓。年号ナ。

接する。宝永比。著作堂藏本

附合れ。萬の花。香。に。葉。子。と。う。ま。ぞ。硯。蓋。

蘭小

硯蓋ふ葉子と盛

本朝諸古百家記

宝永五年印本

卷之五。云く。かんじ。どうつて  
詔ひて。食。煎。硯。蓋。せ。丁。葉。子。と。づ。た。く。り。て。結。の。ゆ。こ。や。ふ。り。り。と。く。ま。く。ち  
み。り。か。く。り。り。硯。蓋。せ。丁。葉。子。と。盛。と。く。ま。く。（葉。と。盛。）  
者。と。盛。一。種。比。墨。如。と。く。り。と。宝。永。以。後。比。半。ナ。と。今。ま。風。く。れ。形。よ。造。り。て

観蓋と称す原とす。かく西。

○二足三文トキミツモン十四

今物比價の安さは二足三文より諸へ元金剛比價より四十  
刻梓の年号からとくも寛永の  
春とまよひて徳源り杏花園著本下之巻よ「金剛」人ニそく三文をうのと云く」との所  
狂歌と載り金剛ハ草履れどいなり。蘭金剛。藁金剛板金剛種。

○三線鼓弓ミツセンコウ古製コヒツ十五

松葉マツバ元禄十  
六年板ふ。永禄の比琉球より地皮二絃比樂器と傳。も泉州塚の琵琶法許  
中小路ナカザジ者一絃とまよて三絃ふせーと世ふさみせんと呼。寛永よりやまと盛。  
おかられくまよて左ふ摸出せぐ。寛永正保比の古國。永禄より寛永より  
ゆうてまづれ六十余年。それを古製と存ト。今と大異へづれの比。古近にまよ  
名。近出く今。の形ふせくまよて。○鼓弓コウ比古製も左よ出と存。ト。ト  
○元。もひの紙主。二線。何らか。今。の。とく。り。き。け。き。の。ハ。何。も。す。ト  
そ。な。か。ふ。機。は。ま。も。金。と。見。す。元。琵琶法許。は。ま。り。い。で。ト。ト。ト。ト。ト。ト。

寛永正保比の古画なら三線の  
古製コヒツとくまよ  
美少年の男子の体ヒツ

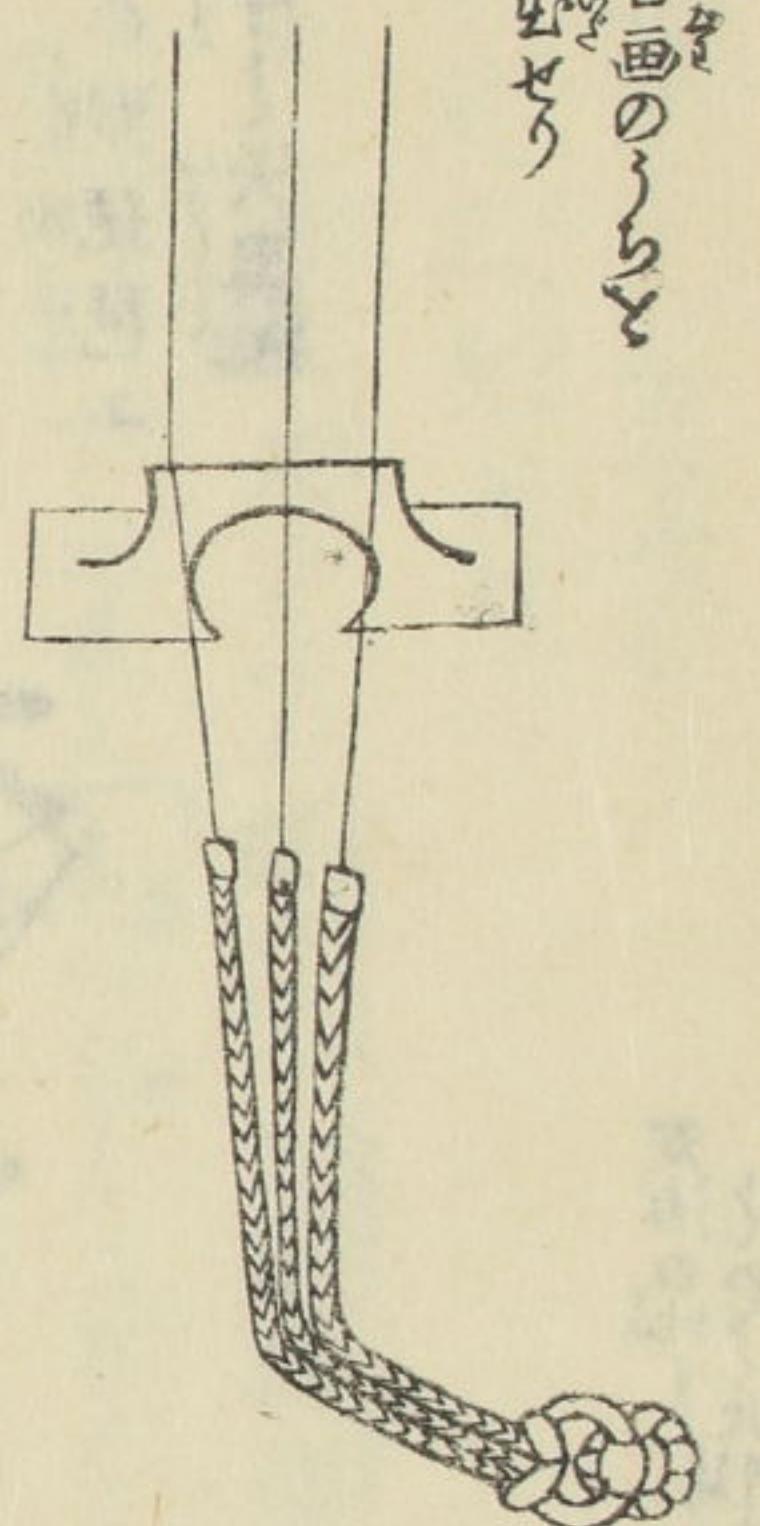


漫考尾の形琵琶ふ  
似たり今と大異

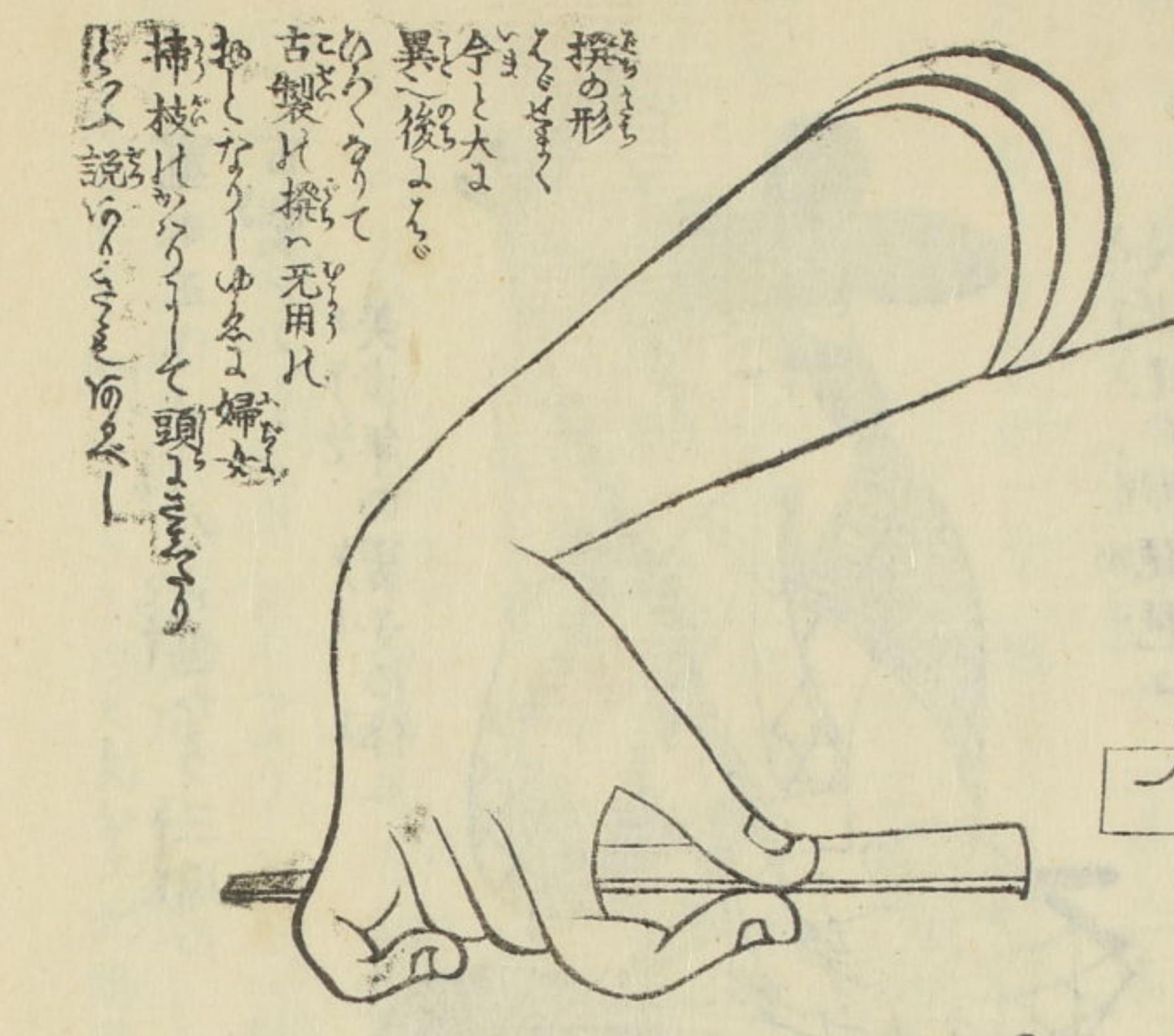


万治年間印本  
東海道名所記  
所載

寛永比の古画のうちと  
撮要して摸出せり



○根緒さな木鎌と弓を合せ今  
異へ盲人へ機の糸とけく此鎌と  
ひもがけて用ひてよ  
昔れ質朴と  
れりべ



○寛永正保比  
比れ古画なり  
鼓弓始於南蠻  
和漢三才圖會  
弓短小  
今と大よ  
異べ



骨董上編 中二千種

和名鈔

今 按。野人以鹿皮為革。一名曰多鼻。宜用此單皮二字。乎

足袋。革。制裁るが元なり。昔應仁前後。と。貴賤男女すべて革足袋と用ひたり。文禄。乃  
比。古画。と。見。るに。小。櫛。の。紋。河。る。革。足。袋。と。く。て。る。男。子。河。り。紫。革。ハ。足。袋。を。女。子。エ

室町殿日記

十之卷。長一の奥方

用ひ。も。と。あ。と。せ。ー。註文。乃。う。し。よ

一。も。さ。き。た。び。ひ。も。ハ。叩。く。れ。な。る。う。ら。歩。付。い。く。 十。足。と。く。と。そ。う。く。れ。天。文。

獨語

我。す。く。き。者。の

比。之。當。時。ハ。し。き。く。れ。婦。人。も。紫。革。の。足。袋。と。く。て。る。の。男。少。女。も。と。て。寛。永。比。あ。ろ。と。年。比。盛。と。絆。く。る。  
中。よ。慶。長。元。和。の。比。生。も。と。る。の。男。少。女。も。と。て。寛。永。比。あ。ろ。と。年。比。盛。と。絆。く。る。  
と。よ。よ。男。ハ。冬。革。の。う。ち。か。け。革。比。袴。と。美。服。と。女。ハ。紫。革。乃。襪。子。と。く。く。を。く。  
り。く。く。く。と。く。く。の。襪。子。ハ。我。と。く。か。れ。時。天。和。の。ま。で。も。の。く。り。て。河。ア。ー。キ。シ。ー。と。く。る。

又 紫之双紙

慶安二年印本上之卷

小袖。き。く。く。と。紫。化。物。乃。お。く。と。く。る。系。と。童。一。人。ち。り。き。る。紫。麻。子。乃。

紫足袋とりく用ひたりとくも都風俗鑑

杏花園著本

卷之二云「足袋ハ白革」と

紫たびとくくのへうと氣のとくの間が入云くあじ船宿

一名女五經

延宝九年板書云「たびと

白からはしもととへむ」とありて延宝比よりうて紫足袋やくとくしる。

かくも○貞享三年比印本よ老女比革くのふ乗に「苧桶」（すり桶）をもとより絵の織紐

骨一紫比革たび一足つきの珠數袋云々

西鶴織留

貞享の比の著述

卷之一云ある老女

のき若き時れまと譲り承る「我等もゆくんハ花色深乃りんきる細の革一筋  
そ姿く作てよりぬ振簾の時も清美よしし菊の絹比革をあらんの革等紫比革足袋  
を花とやりて云々」とあるとて貞享の比よりうて紫足袋とくものながりしゆる

我衣よ足袋の事とつる「寛文の比まで女ハ紫革ふどうそくらん背長一白革  
皮裏毛行り紐ハあらもゆともりさんもみつて一足まで一年も二年も三四年で用ひ

す天和の比より木綿比革の足袋とす云々」今彼是と参考もとく紫足袋ハ天文の

比より寛永慶安比までもとくがくとて延宝天和の比よりくらべて人翁草卷之

骨董上編中占ニ

五ふ昔ハ男女ともス革足袋と用ひ明暦比後革の價すくゆて木綿足袋と用ひ  
いすもれども

松葉を抱持

寛永九九年印本 富る老比革とつる絲よ一も織ざく比木綿たびを

ぐく頭巾で顎かく一云く」とあれで寛永比も木綿足袋あらふ何

○丸づくーの文様

下七

慶安より万治寛文比女の衣服ハ丸尽一比文様もとくもどす

山の井 慶安元年刻

秋乃野れお一もく比蘿や丸づくー

麗山集 慶安四年撰明暦二年刻

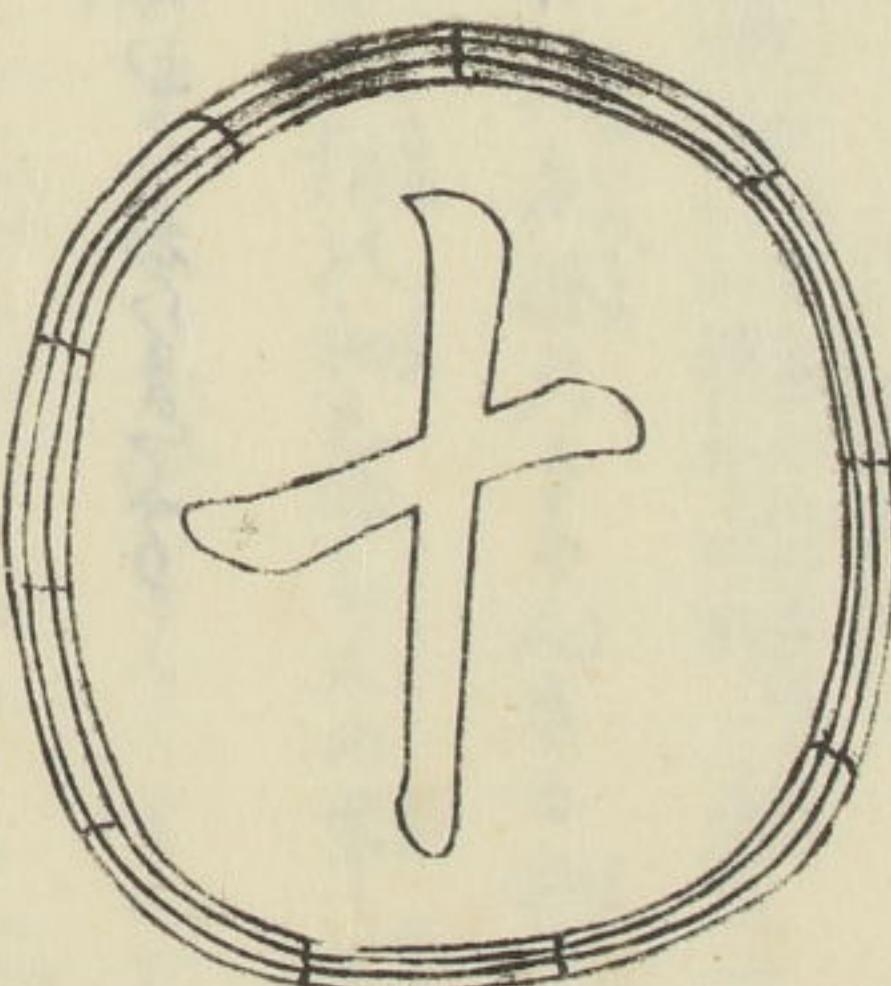
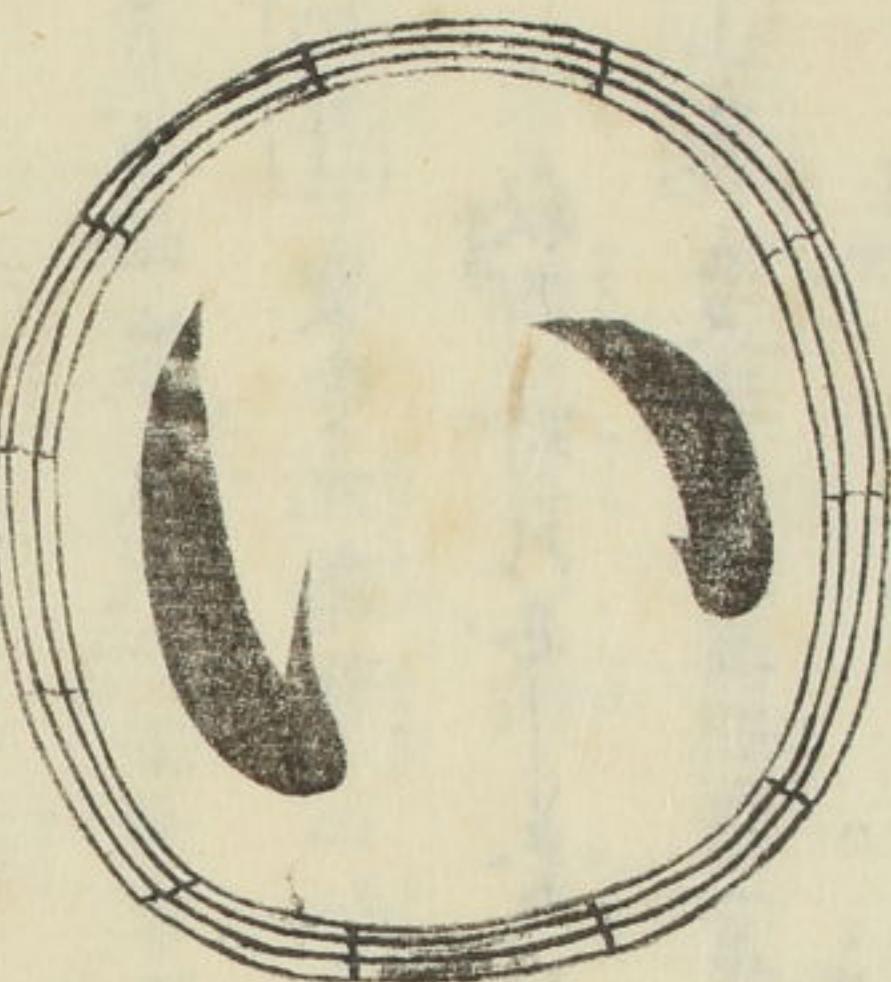
花くよしる 因新や丸づくー 安明

新續大鏡波集

秋うつ 田あ北向や丸づくー 品 芝  
これくはくと花くよし

万治寛文の既と盛り経す江戸三浦屋に名妓團雲をまわし後其著ゆれぐる小袖と卓圍  
よつてく出生地信州嵐宿比武寺を寄附へる今尤もて或人其文様を二ツ  
臨一にて予よ何處か左よりは是又万治寛文比久バシの文様也むとある

一謹



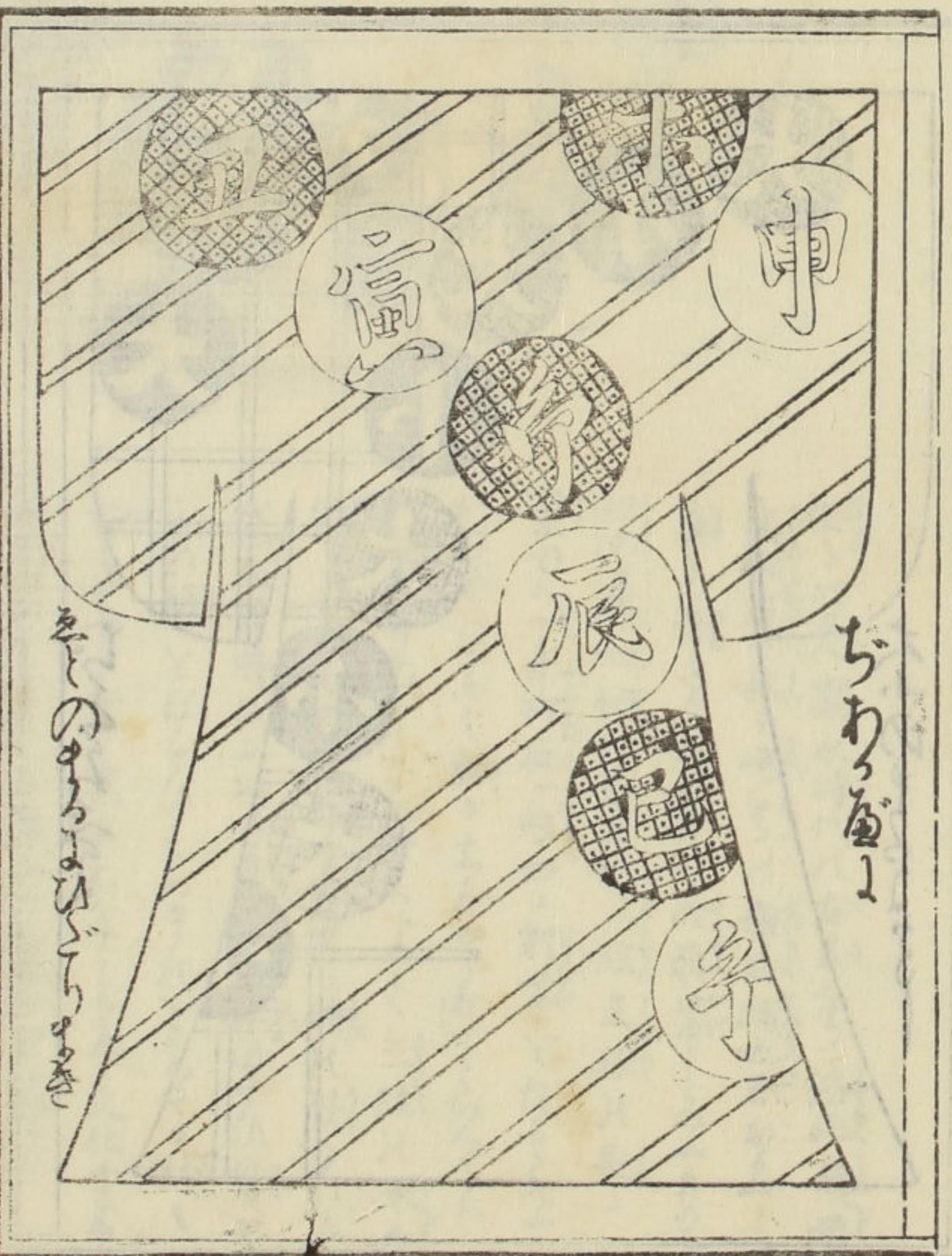
地緋綿子紋紗綾形。總文様丸はうちふいろは四十八文字并み一二三れ数字を  
ぬく。丸の外へ白く染ぬき。文字は黒紫萌黄等色紙とぞとく。たのめぐらのやうに  
金糸と見てゆく。丸み大小異同ありとぞ。

滑畫上編中九三

丸文様離形二種

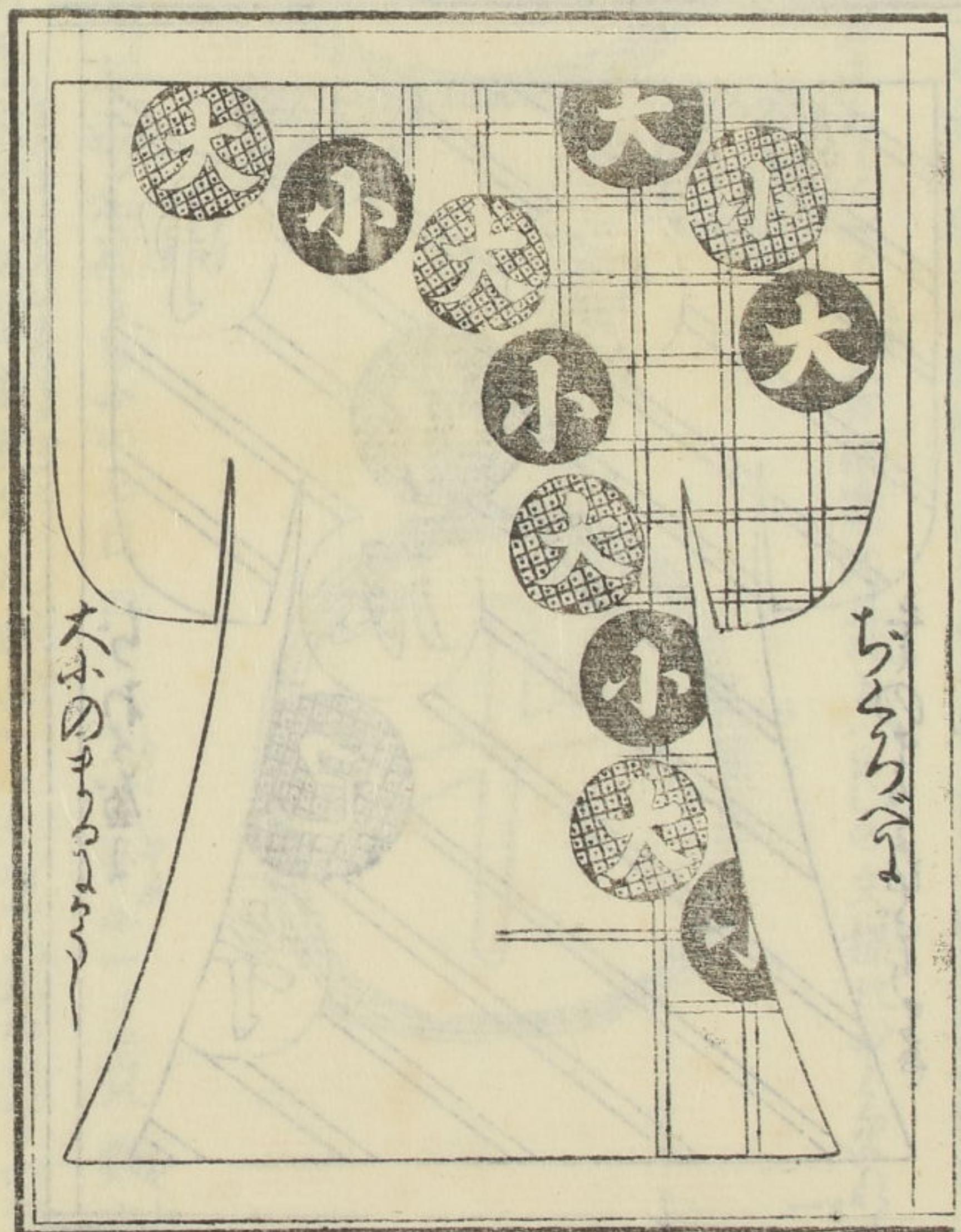
寛文六年  
印本  
新撰離形  
所載

瓢水子淺井  
了意ノ序  
アリ



同書所載

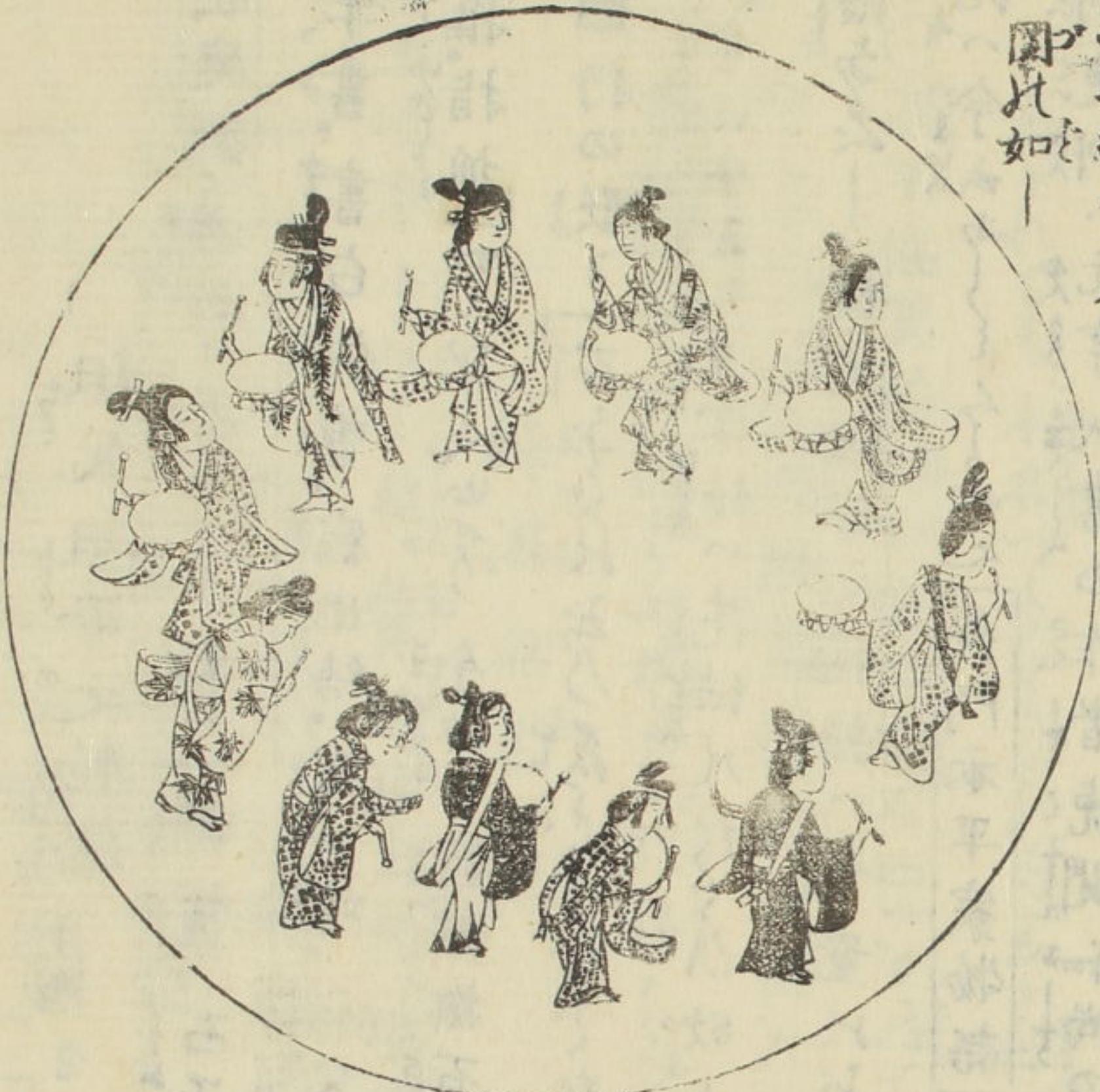
右に卓圓と云離形と  
符合するともその事  
の流行とも云ふ  
これも一證とも云ふ



題目踊図特繪香合



絶て沃掛地ニ蓋ハ面  
此舞繪あり大き  
脚如一



梅子には是 寛永時代古より洛北學  
主村或へ松ヶ崎等は題目踊の名を云ふ  
處よ御よたたたとくに丹前第一のふりの  
松の葉 大元保十 卷之一 三絃鳥組比歌  
京で一茶柳屋が娘四ツ朝顔とたどりて  
かけくいふも腰こしがちかやか とくとく  
則見是をびーこれへくふく 三絃比本手  
組 いふもの作り出せ一時比歌うれぐ  
寛永は時代ふりくまう少女ひうい聲と  
うれ聲とじとくらむとくらむとくらむ  
むきうりく寛永元年より今文化十年  
ふりうておとく百九十年ふりう

## ○祖父祖母之物語

異制庭訓遊戯之事といふ。振聾石子。礎打。竹馬馳。編木摺。文字結。腕推指扒。又云。何曾。宿世結。宿世燒。祖父祖母之物語。目比。頸引。膝挾。指引。

又西行の歌。石かどは。お乃彦。あらや。じかなに。まづ。日出。からりや。ひと。と。あみ。これ今云。手五。文字結。花結。たぐひ。欲。書占。歌占。たぐひ。欲。宿世結。今云。縁結。かべ。祖父祖母之物語。今童。ひだり。むす。じき。よ。の。思。かべ。

目比。今云。かく。長門本平家物語。ふ。見。と。さ。れ。か。れ。し。前。ふ。も。り。よ。如。く。異制庭訓。元亨。秋書。の。作。者。虎闘。和尚。の。作。そ。庭訓。往来。より。前。此。書。か。き。そ。其。來。る。こ。し。尚。し。し。か。く。べ。い。こ。の。よ。う。ば。童。遊。比。原。と。み。ゆ。と。き。と。す。か。り。よ。の。思。か。べ。

## ○辨疑書目録

ふ。異制庭訓。女惠。法印。作。元遊学往来。同本。と。し。く。誤。

元禄五年板の書籍目録。虎闘。作。正。一。卷。其。故。ハ。遊学往来。女惠。比。作。之。寛文二年印本。其。文。異制庭訓。と。異。も。多。か。り。或。人。云。異制庭訓。とい。ち。く。本。名。ふ。ひ。う。ざ。べ。女。惠。制。庭。訓。往。来。を。そ。か。き。か。り。く。後。れ。名。な。く。ひ。故。お。れ。じ。も。本。名。つ。づ。く。れ。ど。も。と。称。べ。一。と。す。

○源平盛衰記。卷之。三四。鼓判官石四口。と。ね。て。一。二。と。突。と。よ。て。と。そ。う。石子。れ。え。ひ。かるべ。小大君家集。俊頗。朝臣。比。散木集。等。ふ。石かどうの歌。と。よ。く。と。す。

童遊の考。れの。く。ふ。是。ど。別。録。と。よ。く。と。あ。が。と。よ。く。と。す。

## ○持游無木

遊学往来。少。性。ミ。撫。聾。聟。敲。木。榜。礎。曉。獨。樂。迎。拍。越。列。子。持。持。無。木。一。打。小。向。拂。竹。打。葉。曉。小。車。等。挂。戲。為。和。法。暎。追。打。無。經。東。言。能。考。之。入。之。考。之。女。持。持。と。よ。く。と。持。ハ。俗。比。弄。乃。字。モ。ソ。ソ。河。を。と。訓。字。考。ト。字。義。ふ。く。う。解。ご。ト。今。按。る。か。伊。勢。の。御。神。事。モ。と。ら。う。ら。と。ソ。キ。打。リ。手。と。う。と。テ。詠。歌。モ。

すとよん。此名目童槍ふうり。もはたてうとう戯と。持遊とひがひ。○無木と  
アハ。轟壙日本をさへ。東海道そへ。もぎ。とく。東國も。つま。とふらめ。之  
つとそてつとく。むき。むき。とく。うき。うき。とく。むと。めと。もと。音相通す。  
ノ。くにごと化形のちひきと木と地と。もと。形化木と持く打つる。戯か。土。  
題唐土ふも。持く。とく。木。三才國會二云「以木鳥爲裏。前廣後鏡。長一尺  
四寸。闊三寸。其形如履。臍節少童以為戯。將一戯先側ニ壤於地。遙  
於三十四十歩。以ニ手中壙。壙。壙。之。幘者爲上」又見干風土記此方東國も。やき。とす  
戯。これみがく。和漢か。和漢。和漢三才國會二。擊壙。びとく。假字とつけ。

遊学往来の無木は是をさへ。

○打出小槌 猿蟹合戯

異制庭訓

ふ。祖父祖母之物語。もあらむ。もしく。だきと。とくと。うり。とく。發語

ととて。名目。たる。よの。ゆび。を。童。昔。を。かへ。いと。かへん。こ。う。か。の。れ。千

四五年前童話比出ふとく。てせきとくらする。童話考と名づけ。一冊。考  
い事と考れ足る。所知。年。の。く。ひら。ね。と。隠。籠。隠。蓑。の。古。歌。ふ。も。か。  
すれども。打出の小槌の事と考え。もれどく。されども。女御の段。よ。一。毛。誠。の。鬼。  
べ。一。毛。盛衰記卷之九。六。ふ。も。相。出。の。事。と。考。れ。と。同。然。小槌の事。見。そ。う。題。と。同。然。  
の。宝。物。集。卷。之。一。ふ。え。され。と。人。比。室。か。打出の。小。槌。と。寶。の。物。と。能。宝。と。傳。て。多。く。又。康頬  
廣野ふ。多く。居。す。う。ん。家。や。面白。う。ん。妻。男。や。遺能。し。ん。從。老。馬。牛。食。物。衣。物。  
多。く。心。よ。任。て。打出。く。竹。く。こそ。中。累。能。侍。べ。れ。と。云。ふ。又。人。傍。す。う。指。出。く。云。  
様。へ。打出。れ。小。槌。へ。目。出。度。室。う。て。有。ど。も。口。惜。ま。す。相。と。打出。く。樂。く。居。す。程。  
程。よ。鐘。れ。声。と。ん。聞。つ。れ。と。打出。す。相。皆。こ。く。と。失。ふ。本。比。侍。ま。り。それ。と  
目。出。度。て。居。す。う。ん。思。へ。ど。も。左。様。の。時。へ。廣。き。野。中。よ。只。独。裸。と。居。す。う。ん。ま。も。  
裸。増。倍。え。れ。中。累。す。う。隠。蓑。の。少。将。と。中。と。相。語。も。有。增。數。ま。く。作。て。絶。え。と。も。

松与天  
受ノ四  
字語ヲ  
十サダ  
追テ根  
本雜事  
但シ可考  
提筆達  
多ヨ公  
見ニ  
名義集

承・是則酉陽雜俎續集の。章色得金椎子と和漢相似  
合戰と童話の原と転びてゆり。義楚六帖二十云。根本雜事云。有隱人  
在果樹下坐。被猿猴擲果。破額。忍之不報。後有獵者與仙人為友。來  
在樹下坐。擲如前。獵者怒射之致死。佛與天受。かくして、按猿蟹  
合戰の話。此果樹と根として枝葉とそぞろかし。童話の原とよぶやん。妙  
仏說より。或國史物語とひく。或ハ漢土に故事ユモとづく。然  
て久々の假り出でゆるものか。虎闘和尚の異制庭訓。今文化十年。元  
五百年前の書されば。祖父祖母の童話ヒトシと存りふべ。五百年前れ童話唯童  
話とあつてゐる。今小孫もい不思議。かく。かく愚考られども。他日童話  
解を刻もぐき志向れど。こそあり。し。

遺畫上編 中九七

散木集

ふきうり馬のひきうり牛見卷持

シハ集

承源法師

ちまき馬のひきうり牛見首假

附

じまき人馬のひきうり牛

きうり乃牛のひきうり牛

のちまき連歌。今接ふ。ちまき馬の羣を造りて馬へまきうり牛へ胡夙を造りて牛。

こへらすと馬と千枚比馬ふりは連胡夙牛と木賣比牛ふりを造りて今世聖靈  
會ふ。或ハ此が子と牛馬と造りて手向ふに是生れ。其馬がうやく人散木集ハ俊頼  
朝臣比集。俊頼朝臣。鳥羽院の清宇天仁の比の人物也。天仁元年より今  
六年ふり。或ハおとし。今信濃常陸下總がまと。その中。其ふくらひ馬とつくり。七年  
ふ手向ふ。かの茅巻比馬胡夙の牛へえ七夕。手向ふの牛と拂はゆ。牛は殊よ  
セタ外縁。かく。七月を以て。かく。靈棚か手向ふ事無あり。故或ハ靈棚よ

手向るが前ゆく。七夕み手向るが後も。とすれやくまれさきまつり。

○奈良の庭竈

三十三

**世間胸筭用** 元禄五年印本 卷之四云。正月奈良中の家々に庭竈いわくそ。釜立て焼火とて。度々敷物して中の家用立ても下人もむろみ樂居して。不沕の居室の間屋と。而乃かゝりとて窓かに入る丸餅と。を火とて焼食もいやうべだ。云々

昔の庭竈は今考へれりよべ。これ前ふる地火炉の遺風かべし。

○元禄二年のら

さきかねのうてこれの脚繁のうてと今もかた

叡慮小て縁より民や庭竈

芭蕉

庭竈牛と雜煮と扇うち

其角

鶏おの外も何多そ。庭竈へ奈良のみゆきと。蓋奈良其原をやわん

。江戸吉原ふ今も正月庭比焼火とて奉り。これふきとく附會の説とつとも。實へ

庭竈比遺風かべ。昔むかひ一様とはふ奈良の庭竈乃むかひふくべだ。元吉原の

骨董上編 中九八

比喩傳へまをれかくこーたゞべ。今へ歎みて焼火そもの

○長崎柱餅并幸木

三十四

**世間胸筭用** 卷之四云。長崎の年は暮の末とく。条云。一餅へ其家の胸側おどりがある。柱もらうて仕と舞ふ一と大く柱はしらをつけて置。正月十五日比左義  
等のとれとれとて祝ひ。主と庭ふ幸の木とて横よこふちく。餅はまこと新貝  
柱。危難子。ゆうひの爐網赤い。昆布鰯鮑牛蒡大根。二日おつよやくの料理乃  
り。此木みつづきて竈とみぎり。もとふ大幽日は夜ふ入れ。やはりひどく無味く  
あくまでつづり。あびと大く。又蒸檜蓋ふのと。當年れえ方に海より潮がまつて。  
茅と長崎比くぶ問へふ。此柱餅比遺風。今もゆり。餅と延命袋の形ふくらむ。大黒  
柱み打つけて茎春ふくらむて。ものづく落らねまつて。わすくらむとぞ。

○宗祇の蚊帳

三十五

今俗みとをどくかうひの虚言して自誇まると。百七八十年前の謬よ宗祇の蚊帳（ムシヤシ）  
とひひたう。宗祇法師とおかト蚊帳ふ麻うと虚言して誇（ハラフ）るからじとう。世は後（アヒテシテ）  
なりしと。

嵐山集

嘉慶四年撰明曆一年刻

卷之四

お角（カク）（故帳）林（ハル）則（タガレ）義哉

眞德

色（シロ）身（ヒメ）屋（ヤマト）室（シキル）余（ヨリ）家（ヤサカ）と家（ヤサカ）のやも

ソヌナレモモリと故事（コトハジメ）用（ヨウ）ム

以上右の集ふとぞより後元禄の比年（ヒイニ）ともいは傳（ハラフ）ふや

西鶴あさうの友

元禄十二年刻

卷之四

「はる時旅宿ふく。山家  
のひともる商入集りて。今宵ハ七月七日星もあつまし天の川。かくぞのりてとくらべ。  
鳥口篭（トリハシロ）とくらべてとくらべと星のそとす。星のそとす。子細等れど、づきまで紙打てとくらべて  
まれぬ人（ハシナシナシナシナシ）へ公家の折（ハタハタ）とくらべてとくらべ。我ハ小手筋方（コトハシナシナシナシナシ）れど、とくらべ連歌附に宗祇法師諸國を  
修行し経（キミハ）時人（ヒト）縁（ 缘）いあらぬなり。東海道岡部の宿（ヤマハシ）を相宿。同ト蚊屋（ムシヤシ）を  
とくらべ昔物語（アラタニタリ）とくらべ。昔宗祇法師とくらべたとくらべとくらべ。前より此  
人（ヒト）がうながうにかくぞとくらべてとくらべをほれどのまことありなり。

骨董集上編中之卷終

骨董上編中九

○火燶并地火炉再考追加

嫁迎記

嫁

夜

火燶（ヒタチ）並（ハタハタ）地火炉（ヒロツル）再考追加

すうあるあつて。くろくめくくで。かよおうどある人のうそを  
されば。當時もすくとくとつむのあり。証（シテ）としへ。それよりとあり。が。文明以後よりをきく。あくとも  
決く。唐ゆき。あくとも脚炉（ヒロツル）。足をあくとも。泰山庵（タケンアン）かくろう。以前より。前より  
いどる。窓のを。くらぶくらき捨巻の圖も。泰山庵のころより以前のまゐをあがりあらん。宗長手記

下

大永六年十月の條よ

「はる

」

大永七年十二月の條よ

「はる

」

元本火燶の字よかあひつけざれども。火燶（ヒタチ）の二字をこだわらぬれば例の明應  
の撰（カク）へとりか林逸節用集（ヒタチ）。火燶。脚燶（ヒロツル）。又かくと云ひのたゞぎあり。とかまこうけ  
たれ。育便（カクビン）よく火をことごとく燶（ヒタチ）をたつとすむ。当時の讀くせのろべあひだ。  
火燶の字をゆめこたつと讀べま。

○さて右の書は「炉火あぢろるる火燶」とあるを考る。當時こちうといふ。今云こちうやら  
の事ときたる。今炉火をこちうと云へり。よしたゞ。嫁迎記よこちうのやううのとある

今之言ふそりも。うらやまうらのやううめとりく義うくん。すへの通例のこゝう。今之うち  
ひくゆうしあべ。寛永のころ別々高となくしてゐる。今のところもあらびき。さるから  
ちうと云名をあひてとと前よりうがだくさん。今も信別のこちうを板子ともいつ先  
まへめいざとそくして火氣をかくと。うサハ通例うりひくまう。それで古制のうりうる  
べき。格子をつくら後まん。

**印本今昔物語** 卷一 恵明云々の條よ「太明いり。火燐乃灰をかり取集め云々<sup>ト</sup>」  
とあれど日本云々火燐の字す。印本小字云々後のまへらる。印本のみ見え  
たもの名へふり。とみありひまぐひそ。

○前の火燐の考の因よ地火燐の事をとる。引くやうとくよ舉。

**續古事談** 卷一 条院の御時。臺盤所よそ地火燐ほのどと云まへり。云々

**櫻花物語** 玉のうてうの巻よ「居厨子所の御をとられ。云々又たりとあけたる  
わうしづらのほきくあに八六人ちひろのりそにねあくと。おりのことをぐめり  
薦撰字鏡= 爐の字の訓。火呑とわれば。ちひろへ地火燐といふが如。さにわくに近見  
よふふくまくらきろ世の庭竈へ地火燐ついでの遺風す。ベ。唐土の燐火會す。も似たり。

地火燐の事は外すもあやうびれどくもなづきとあつたまことにあたはくもあつた。

骨董上編 中巻追加一

○右か引る。中古近古の書道より。假字のうろえぬもかやうれど。その  
事にあつて。ほのうりう意をりらひ。古書の字を失ふよ  
うのがざればす。又字音いかのれがとる言ふも假字のたゞるぞ  
かわかる。いよせん。他よあつてかせつれば。それをあらだしていふ  
ゆべ。又字をあきらめよもかやうべ。○是等のかもひきあることうらる  
べたことかちく。凡例よつばらうれど。つまび板よ雕きのり。と書賣前快二  
卷をとくよ弘くんと。くそりとせられば。すじととを得。後快の  
卷首よ載べくあり。うじん。次の正一やうざと。なりぶゆくと。

○後快目録

▲下之巻前

一 越杖考。打越樂國。古製

(二)

二 碓りの考。碑毒國

(三)

三 羽子板考

(四)

四 粥杖考。北越の祝木の國

(五)

五 か乳母日傘とゆの譜の原

- (六) ひの名義ひのみの假字 (七) 離遊のちぶみ (八) 離社離合  
 (九) 源氏物語の離拵 (十) 古書ども小ええー離拵  
 (十一) ひのみの調度 (十二) ひのみ衣 粟白面の御神玉  
 (十三) 古製離圖 制作質素  
 (十四) 室町家の比の離圖 (十五) 伊勢の小米離 質素  
 (十六) 離遊 三月三日小ええー考 (十七) 唐の時三月三日鏤人あし事  
 (十八) 大ひのみの繪櫃 古圖をくわべて古雅  
 (十九) 離の使圖 菊川か 筆へ (二十) 離枕折敷圖 質素  
 (廿一) 婦丸の離 (廿二) へいか草 ▲ 上已のひのみの考の多ひの本意の質素をひのと  
 美巧を妙むまととくまとと童よもりと

### 下之卷 後

- (一) 子日の離遊 (二) 賦物のひのみ 古畠の古圖  
 (三) 勸進比丘尼の繪解 古圖 (四) 屏風の古画 朋服。その夜とひるとくら  
 (五) 比比丘女。童子の原 番のすき (六) 端午の茅巻馬 ▲ おのれまくらひのみの假字を用ひれども比比奈の鐵  
 前をすくいし證 (七) 小兒をかどせよがととのふらの考 (八) 端午のひづり花。五月あらうと云  
 (九) 後妻打考 同古圖 古畠よりとく  
 (十) 手鞠考 (十一) 酸漿を吹きと奉今よりかとを八百年ひづ  
 (十二) 前をすくいし證 (十三) かくれねび。白地藏。今云が  
 (十四) 手鞠考 (十五) 中古近古の編笠の考 同古圖  
 (十六) 桜久塚牛から坂 (十七) 上古中古近古の女の髪の風 同古圖  
 (十八) 桜久塚牛から坂 (十九) か国奇舞妓の古圖并考  
 (二十) 桜久塚牛から坂 (廿一) ひづりみじりいーあど。今云手玉の里と  
 やれどもとくらひのみの前快二冊の各とよ考へのなづらうりならうり引ひ  
 やれどもとくらひのみの後よつてのひだりもひやうれが再考をくわくあと後件の  
 卷のをりに附る標目左のひづり

骨董上編 中巻追加二

### 再考標目

- (一) 繡屋の白袴再考。けらとこゑど  
 励進聖判職人哥合上

- (二) 竹馬再考

前快二冊の各とよ考へのなづらうりならうり引ひ  
 やれどもとくらひのみの後よつてのひだりもひやうれが再考をくわくあと後件の  
 卷のをりに附る標目左のひづり

三 嘉浦曾目再考。圓太曆 うら前 年内侍日記 二 粉の看板再考。山

四 粉の看板再考。うくの

日蓮御書。よしの

物の看板再考。うくの

五 錢湯風呂再考。湯檻とりふとあす。日蓮御書。よしの

六 石榴風呂鏡磨石再考。諸唇又証をかわくそなけたり。かごま草

七 伊勢の風呂吹再考。引ひくら。諸唇又証をかわくそなけたり。かごま草

八 之と帶再考。諸唇又証をかわくそなけたり。かごま草

九 豆腐をゆべとりの言。鐵人尽。よしの

十 握灯行灯再考。燈囊鉢。その外引ひくら。十一 ぎよゆうのちゆらん再考。

前の考よむなむ。奥義のやまうふを綴をくらだる。よしの

十一 蟬燭再考。諸唇を引く。

十二 蜂燭再考。諸唇を引く。

十三 伏編笠名義。食籠の図。東山殿御飾記。君墓觀。貨德文集。斬續大づか集。おも

十四 桔梗笠淺葱帽。引ひくら。

十五 淳世御坐再考。和訓鑑。ようきかねほ蓄あると。

十六 瓢蓋再考。今昔物語。よみがえり者おの交莫子をくらだり。車うすもあれども民間

十七 瓢蓋再考。おもれを用ひる宝承の後の中車あるべ。但式正のりのよあくびくらひ。おも

十八 衡車食籠再考。おもての名義。前め

十九 異制庭訓年歎考。山中より天童寺の名あり。

二十 雜事再考。此經の本名ハ根本説。一切有部毗奈耶雜事と云。

廿一 根本雜事再考。此經の本名ハ根本説。一切有部毗奈耶雜事と云。

廿二 無本といふ物の再考。十訓抄。鑑藏抄。あよふえんた。无木簾のことあると前

廿三 一二の再考。前よりいのうのたゞくうべーとりひくら。青丸の

廿四 根本雜事再考。此經の本名ハ根本説。一切有部毗奈耶雜事と云。

廿五 卷第十六小獮猴投果の事ゆゑと佛與天變の語。義楚六帖。ひだよ

廿六 霧文すて異同あり。又小しきそれをたゞと。山外の再考あるとあれども

廿七 後帙二卷ハ。うち古唇を引けれど。とかやうれば。されどとく唇目を舉る。

以上後帙二冊來乙亥春發行

前帙二卷の引唇。からくいもううれに草紙繪物語のたゞひあれど。近古物より。そくらうのうちよめまことん事まつてられど。當時を考るたつたあきらめあると。されば識者の看小あづべたものうるわべ。その唇目を举る。後帙二卷ハ。うち古唇を引けれど。とかやうれば。されどとく唇目を舉る。

小りのゆうび。ワづに毬杖がよく粥杖離遊考の引書を充て  
前帙二巻と趣の異なるをもつてし。但書籍の年序よりひらび。引  
用する次よちくがひもあるせり。

▲ 毬杖城の考引書

- 萬葉集
- 繢物紀原
- 源平盛衰記
- 袖中抄
- 遊学往來
- 下學集
- 壕囊鉤
- 本草啓蒙
- 繢日本後紀
- 遼史
- 平家物語
- 日本歲時記
- 訓蒙圖彙
- 世諦問答
- 和漢三才圖會
- 三才圖會
- 和名鉤
- うつほの物語
- 義經記
- けれく草
- 中山傳信錄
- 渥誓雜談
- 年中定例記

脣董上編一卷(总四種)

以上  
十種

▲ 粥杖考引書

- 清少納言草紙
- 牧衣
- 増鏡
- 下紐
- 日次紀事要言
- 和訓釋
- 和名鉤
- 契沖雜記
- 日本紀
- 古事記傳
- 脅宮女御集
- 源氏物語
- 牧衣
- 清少納言草紙
- 濱松中納言物語
- 斧内侍日誌
- 日本歲時記
- 婦人養草
- 蘆中舊記
- 玉かたま
- 厚顏抄
- 中醫集
- 荣花物語
- 增鏡

- カタスノの日記  
○ 壱麿抄  
○ 無言抄  
○ 加茂保憲女集  
○ 名物六帖  
○ 鋸屑  
○ 土左日記  
○ 諸国奇遊談  
○ 滑稽雜談  
○ 和漢三才圖會  
○ 丹後守為忠家百首  
○ 女用花鳥文章  
○ 雜遊記  
○ 拾芥抄  
○ 御傘  
○ 雍州府志  
○ 其袋  
○ 日本歲時記  
○ 昔ニ物語  
○ 五元集  
○ 繢猿蓑  
○ 女用訓蒙圖彙  
○ 本朝食鑑  
○ 朱ひくさき  
○ 異本和泉式部集  
○ 年中風俗考  
○ 日本紀通證以上五十四種  
○ 古事記  
○ 世説問答  
○ 増山の井  
○ 文昌雜錄  
○ 五元集  
○ 繢猿蓑  
○ 古事記  
○ 世説問答

